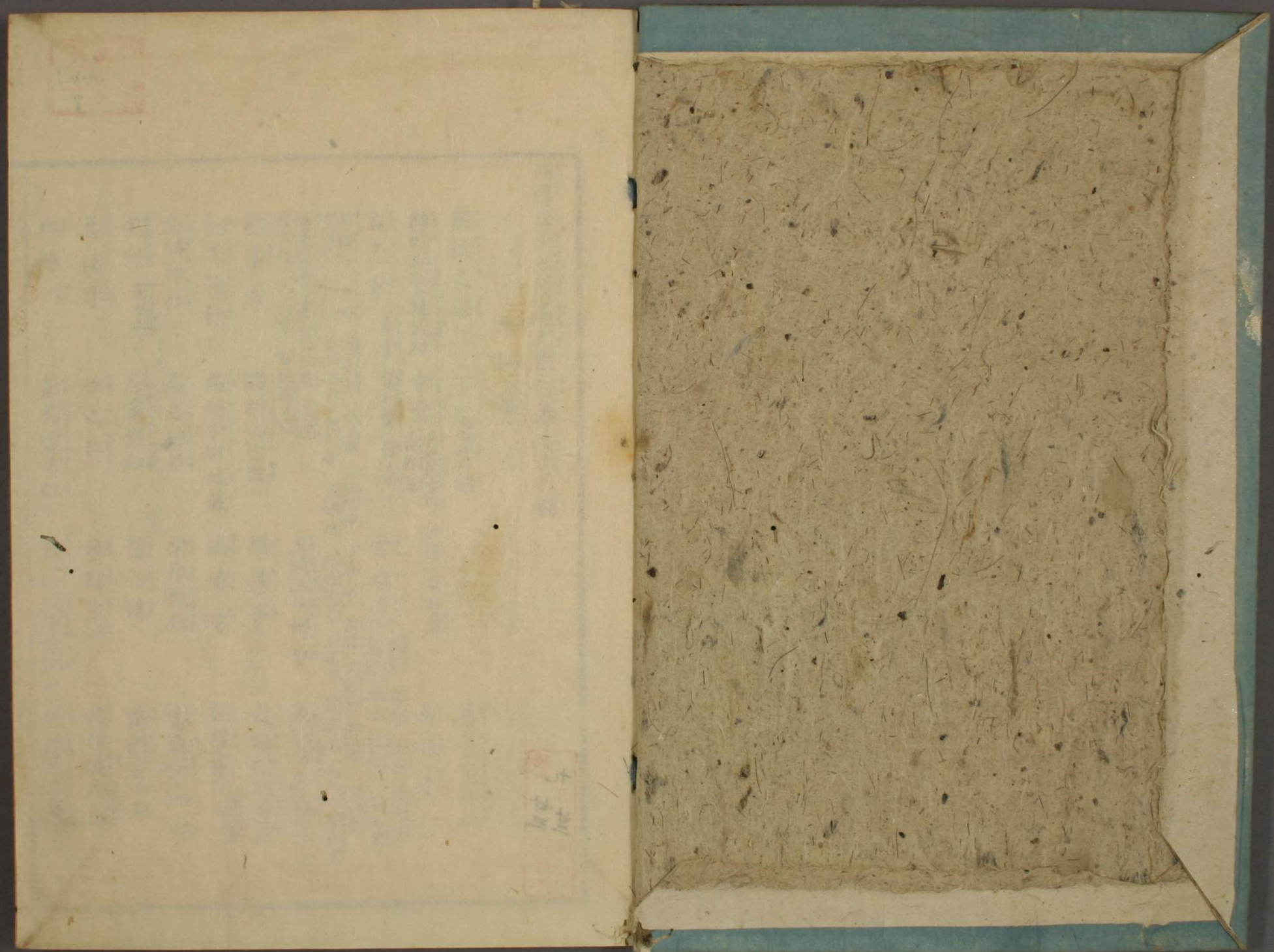
西國三十三所名所圖會 七

ル 4
3652
7



門見4
3652
7

昭和廿三年九月廿三日 購求

西國三十三所名所圖會卷之六目錄

大和國

國號之譯　二上山巖窟越　二上嶽　葛木二上神社
熊野新宮權現社　傘堂（長德院靈牌　藤懸墓）　釣鐘　吉弘墓　高雄寺
石光寺　本堂　常行堂（深之井）　當麻寺（本堂　東塔　西塔　金堂　講堂　西御堂　影向石　未迎寺）
引接松　一夜竹　行者堂　宝藏　五社明神　法華堂　鐘樓　不動堂　御供所　御影堂
地藏堂　阿仏井　求聞持堂　庚申堂　念佛院　阿弥陀堂　山越堂　紫雲廊　大門　藥師堂
新曼陀羅　重新曼陀羅　奥院　大坂山口神社　天羽雷神社
練供羅　天備宮　當麻國見塔
龍峯寺　腰折田古跡　福應寺　孝婦伊麻舊跡
長尾神社　布施今市地藏　現德寺　人麻呂碑　景現寺
金村神社　為志神社　宇佐神社　當麻山口神社
遊岡　笛吹社　火雷神社　笛吹池　角刺宮旧跡
忍海寺　袖之松　來迎寺　鴨都波神社
水越川　若櫻宮古跡　秋津嶋宮古跡　孝照天皇陵

葛木大重神社 蠶一言主神社 本社 摂社 三社 宝庫 護摩壇 一言主寺 鏡石 辨天祠 拝殿 二之鳥居 一之鳥居
高宮廟 他心宮旧趾 名産大和縞
芽原寺 本堂 行者堂 観音堂 笈掛杉 鐘楼 藍神 香精水 護摩壇
孝安天皇陵 白鳥陵 嗅間丘
橿原宮古趾 佐田丘 彈琴原 重坂川 葛城川
高取山城 竹取 竹取翁 觀學寺 子嶋先德 鷹鞭山
高生神祠 倩水神祠 倩水井 子嶋神祠 靈鷲寺 越智家墓
彼多聽井神社
○
第六番壷坂山南法華寺 本堂 二王門 観音堂 三層塔 鐘楼 神祠四社 鎮守権現社 因幡堂 秀長公像 本田彦像
奥院 五百羅漢名 曼陀羅石 比蘓寺古礎 世尊寺 六田淀 抑之渡
吉野名産餅煎 安騎野 秋野川 東野
一之坂 都藍尼像 一蔵王堂 長峰薬師堂
村上義光塔 同碑 千本櫻 日本花 七曲

松山御茶屋古跡 藤尾坂 大橋 閔屋花 櫻ヶ嶽
金島居 二王門 金峯山寺 本堂 観音堂 経蔵 大塔古趾 四本桜 銅燈篭
十休地蔵堂 蛙飛神事 威德天神社 花供懺法會式 吉野山 吉野川
實城院 什宮 吉水院 後醍醐帝御物 駄天山 五臺寺
櫻本坊 什宝 五本卒都婆鐔 金輪寺茶入 佐抛神社 御影山 村上義隆碑
勝手神社 古鐘 袖振山 如意輪寺 正行毛塚 後醍醐天皇陵
松翁廬跡 竹林院 椿山寺 布引櫻
天皇橋 天皇桜 梵天社 猿引坂

二上山巖窟越
河内大和の両国に跨る
東の方大和国葛下郡
あり
万葉
ふたがみや
かくろ月の
とりのぬ
隠りたりし
かくろ
あのころ
半山

大和

大和國ハ大管十五郡にして地勢山繞りて中平地とひらく南ハ大山多く就中大峯釈迦ヶ嶽ホの深山ありて名所舊跡多し

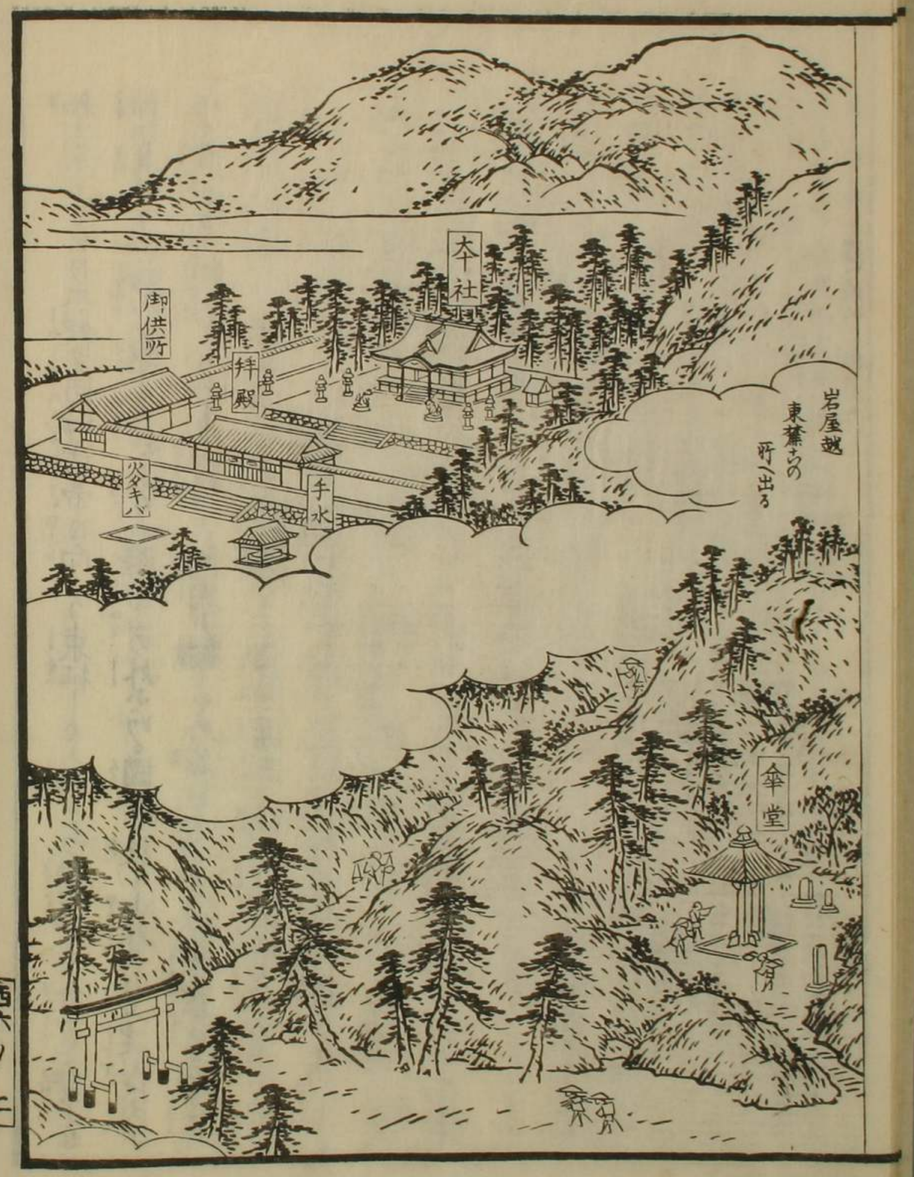
抑人皇の肇神武天皇天下ニ王たるに逮んで神代の蹤をつぎ日向國宮崎に都し給ふ此時天下草昧にして封域いまだ定まらず帝東征ましまして後はじめて都を大和國橿原宮に定まりまし國造には珍彦が居るにあり故に大和國ハ日本の惣號として皇居を營し給ふ國なれば通称して一國の名とせり

聖武天皇天平九年十二月大倭國を改て大養徳國とし同十九年三月又かへしなをて舊に依て大倭國としのち又天平勝寶年間よりして改めて今の如く大和國とするよし拾芥抄に見えたり延喜開題紀に曰大倭國草昧のはじめ居舎いまだあらざれば人民唯山に據て寓る是によつて山戸といふ釋日本紀に曰開闢のはじめ土地湿ひまだ乾かざれば山路を登るに人の跡おほし依て山跡といふ善隣國寶記に曰後漢書倭王居耶摩堆蓋此國人到彼土稱大倭故如此書乎云云日本世紀曰東朝なり大倭の三字連綿せるはじめハ或ハ本朝より書して異朝なきに従ひ或ハ異域前に唱て我朝後に

和ともいふ日本釈名曰神武帝日向より東征し給ふ時まづ難波より枚方に登らせ給ひ其より伊駒山を越て大和へ入給ふ膽駒山の外にある國なる故に山外といふ淀川の北の内にある國なれば河内といふ山外ハ河内に對しての名なるべし又伊駒山背にある北の國を山背國とも書きしなり背ハ北なり又加茂真渕が説に國の中平かにして四方山なれば山門なりといひ本居宣長が國号考にまづ此國ハ四方山の繞まく中にあれバ山處の意なるべし（處をトといふハ立處伏處寝處井處などの例なり）或ハ山秀の約まりなるか（こハ杵につづけるを切る古言）又山内なるべしとハ山の内といふ意なりと記せり然るに荒木田久老が槻落葉に夜麻登ハ家庭處の畧轉なるべし斯言故ハ應神天皇の山城國葛野を望まして詠ぜたるかへりとみすれバ毛々知陀流夜迩波母美由（とみまし）夜迩波ハ家庭にて家居の多く流るとほめませる御言なりとし（迩波ハ海上の平らかなるを爾波といふ迩波もつけ船も波も迩波もひとつ言にて平原をいふ）言なるべし○虚見都倭のまくら詞ハ饒速日命大空より倭の國を見そなはして天降ませし故のことト師の考なりつるもの應神天皇の葛野を望ませしみこと大御哥にひとし大空より望ましく青垣山おもてる家庭の處しあがりて倭の國にハ天降ましあるべしさて爾波の爾をそふべき婆とのへハ音便の常なりその婆と摩とハ相通へることなれバ倭ハ家庭處の畧轉なるを知るべし虚見津倭國秋津島倭國などいふも山にしかるなるをもとも山の義にてハあらねならし思へ給ひとぞ何也ちと

熊野
権現社

平山



西六ノ二

二上嶽

二上山又俗に二子山ともいふ大和河内の両國に跨る北を男嶽といひ南を女嶽といふ河内國山田村より當麻までの岩屋越といふ八此両峯のあひだを踰て行なり道嶮岨にして殊に一両脚を蹶くも遠からぬ八忽ち數十間とすべる俗に是を石車といふ河内より大和路に越る内にて第一の難所之然れども當麻寺にいたるに八此道ならでハ其便よからず故に嶮路をもものともせずおのくこゝを行あり

續古今　むば玉の夜ハふけぬらし玉くしげ二上山に月かたぶきぬ　家持

續後拾遺　郭公あかずもなくかむもしぶ二上山にあまの一聲　讀人しらず

葛木二上神社二座

二上山の男嶽の絶頂にあり今権現と称し延喜式神名帳に出
例年二月廿二日藩州より修驗者きたり當麻寺の僧侶と倶に護摩供を修法ハ是此近村より請して五穀成就の祈りをなし同日ハ山上に酒肴上風者の簞賣或ハ觀物ならそ放下師なんど出て賑しく隣村の老若男女嶮岨をいとはずして嶽を登りて群集し此旬の法會とすべし
當麻に下る禁裏あり當麻郷中十七ヶ村の生土神なり

熊野新宮権現社

熊野新宮ハ四座にして、第一の御本殿ハ伊弉諾尊第二ハ伊弉冊尊第三ハ國常立尊第四ハ天照太神と云觀音靈驗記にハ早玉尊又竜蔵権現と云本地薬師如来と云江談抄に本宮并新宮ハ太神宮なり太神宮ハ救世觀音の御変身とあり

當社例祭ハ九月九日にして八月廿二日を夜宮祭といへり傳云八月廿二日ハ権現當地に遷らせたまひし日九月九日ハ御鎮座の日なるべしと今もあらん歟當郷の風俗にて今年初て嫁を娶り聟を迎へたるひハ初て子を設けたるせし者と夜宮初と号し其家より権現に飯を握りて供じ又親類朋友懇意の家毎に握飯を配ると旧例なり又其家より竹筒弁當とゝのへ親類懇家を誘ひて新宮に参詣し此山中にありて饗應終日遊興して楽しむと風なれ尤其饗應なきハ皆銘々弁當を携へ宮に詣で先そのれ握り飯を神に供じ而して後にこれを食して楽しめり故に此日ハ家に居者なく皆新宮の山に遊て

夜宮と號ハ是此所の一奇なり。

傘堂

新宮鳥居の傍にあり軒にして凡二間四方中心に柱一本を立る長サ凡八尺太サ凡一尺二寸四方
心柱一本を以て造る故に俗に傘堂といふ　岩屋越の旅人こゝに下るなり
此堂ハ前の領主本田侯の菩提の為に恩顧の臣領地の農民に相談ひて建る所之軒の瓦の面に本の字を印す其證とぞ
心柱の上の方に扉ありて左右に開くべし仰ぎて見る内に君侯の靈牌を納む
靈牌に曰　長徳院殿前拾遺泰譽迎和道永大居士神儀　牌面の長一尺巾二寸八分
屋根臺扉に惣金箔蒔重なり　惣長一尺六寸

心柱左の脇に細き柱一本あり此上に横木ありて此に鐘を掛るあり朝暮に是をつきて旧恩を忘れず弔ひ奉る事とぞ尤仁恵の深くまします事ハ此鐘の銘に委しく著せり然るに近来賊難を慮て主ハ此鐘をとりおろし新在家村妙楽寺に預け置て且霊牌も破損あらん事を恐れて村中預りて置て今在家染野新在家ホ二ヶ村毎年順番に預り八月朔日此傘堂に持来て香華供物をそなへ妙楽寺の鐘を出してあれに釣て四面に幕を張て灯燈をとぼして村中の老若あつまりて僧を請じて讀経せしめ佛事を懇切なり妙楽寺に至りて鐘の銘を見るに半滅して文字明らかならず是ハ小堂に釣りて折から里の童共戯に小石をもて打鳴せし故に斯ハ滅せしとぞおしむべき事なり銘中にいふ居士姓藤原氏本多政勝［享年五十八寛文十一年十月晦日］と見へたり然れバ八月朔日ハ正當の忌日にハ有べからず全く村民の間隙にまかせて此日に弔ひ奉るなるべし尚新池之記にありても鐫しあり延宝二年甲寅十月吉辰願主吉弘統家としるし重ねて委しく撰し大和拾遺名所圖會に出すべし
鐘大サ龍頭より凡二尺六寸余
下の径凡一尺六寸許

吉弘統家之墓

傘堂の傍にあり釣鐘願主の臣也　俗名吉弘甚左衛門之尉統家
壽弘院法誉西願居士 元禄九年八月廿日

藤懸氏玄達墓

同所にあり豊後國住人なり　延宝六戊午年霜月廿八日
右両墓とも恩顧の人々なりと聞ゆ

當麻の郷中
夜宮祭の
挺山

高雄寺

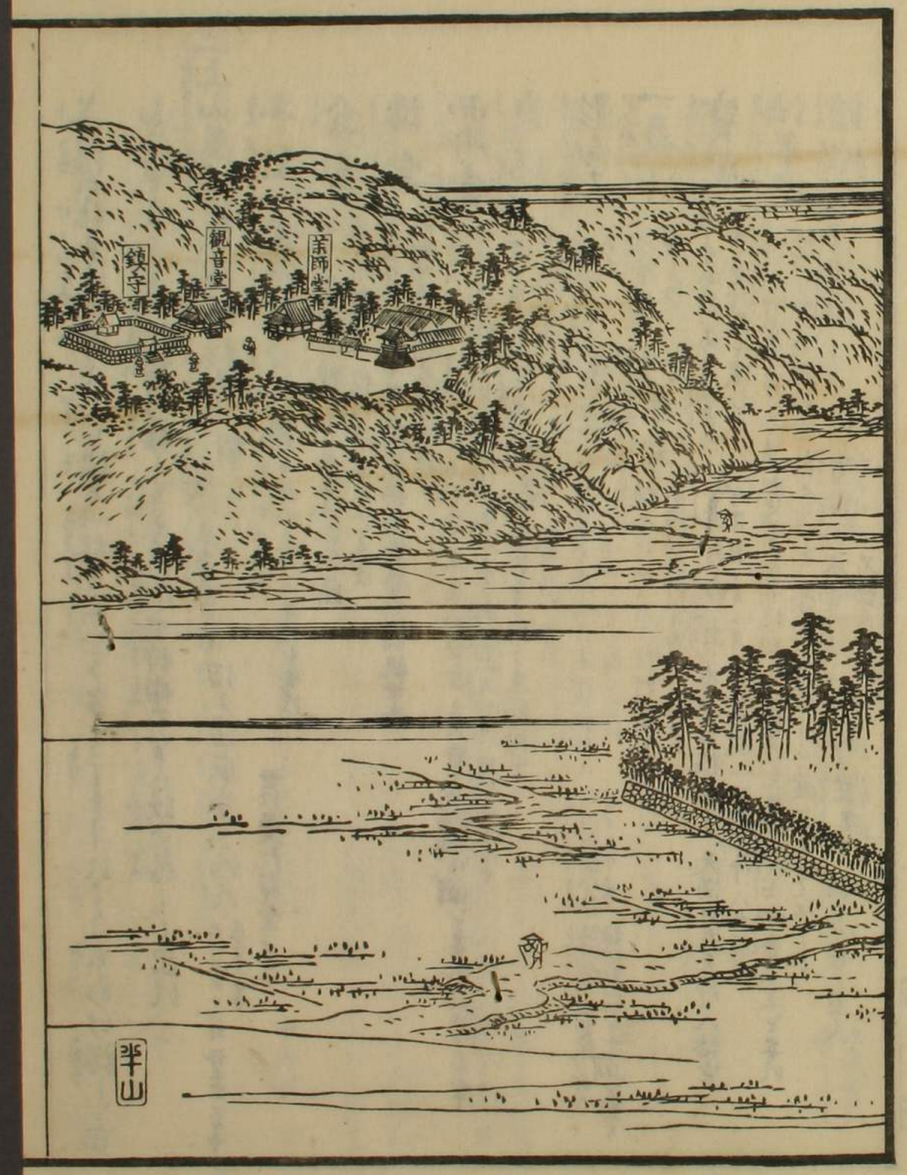
新在家村にあり二上山呂薬師堂にて本尊薬師如来別に観世音安置の堂
一宇鎮守権現の社あり
染野村にあり染野寺染井寺染寺ともいふ當麻寺より四丁ばかり北にあり

染井石光寺

本尊　弥勒菩薩　石佛あり

常行堂　本堂の北に並ぶ　染の井　本堂の前にあり　糸懸櫻　染の井の傍にあり
蓮糸と染る井と云　染野の櫻ともいふ

當寺ハ往昔人王三十五代　天智天皇の御宇此地より夜々光明を放つ事
あり此由奏聞に達し勅して見せしめ給ふに大石有て形佛像に似たり是に
依て弥勒の尊の像と作り奉る則ち寺を建立し此尊像を安置し光明に依て
石光寺と号し給ふ其後百年の星霜流経て四十七代　淳路廢帝の御宇天
平寶字七年六月廿三日當麻寺に於て中將法如尼公浄土の大曼陀羅を感得
の時一人の化尼来現し此地に井を穿て蓮の糸を染の上に奇なる一色乃水
を五色の糸と染あせず是にうつして此井を染の井と称し寺を染寺ともよび
もせり又堂前の桜樹ハ往古役行者の栽かひく誓つて曰佛法の盛衰此桜の
繁枯によるべしとかり時に年々繁茂し花爛熳たり後に曼陀羅成就の砌に


観音堂
薬師堂
鎮守
半山

石光寺
漆の井
糸掛桜
高雄寺
本堂
鳳凰堂
漆ノ井
糸掛桜
蓮池

菩薩の化身染の井に糸と染め此桜に糸とうきて干さにけり糸かけ桜とも言

ちはせりしぞ又染野の桜とも号ハ尚中将姫の事ハ次ニ悉く出ハ

二上山萬法蔵院禅林寺

二上嶽の東南九子山の麓にあり　俗に當麻寺と称ハ　真言宗十六坊　浄土宗三ケ寺　尼寺三ケ寺

本堂　蓮糸新曼荼羅　長一丈五尺並ニ中将姫来迎の弥陀を安ハ　世に曼陀羅堂ト云

本尊の前右の傍に有り本尊弥勒菩薩　前に不動明王　役行者　四天王を安ハ

金堂　金堂の北に有り本尊阿弥陀佛　地蔵菩薩　観世音　五の服に中将姫の像を安ハ　此所に おゐて不動明王　毒門天を安ハ

講堂　金堂の右の後明王院の内ニ有り本尊釈迦如来を安ハ　脇士　普賢　文殊の両大士　悩賢十王を安ハ　此所に おゐて中将姫剃髪し給ふ云傍に香水あり剃髪の御洗水を用いる人々

西御堂　金堂の右の後明王院の内ニ有り本尊観世音　南の山の方に有り二層　同西の方に有り東塔に同じ　観世音を安ハ

東塔　大日如来を安ハ

西塔

影向石　金堂の南あり

来迎松　金堂の東に有り古木の幹の二ツ三ツ四面とかこい覆とあり　来迎の松の東にあり　練供類此所ニ有ると云

一夜竹　本堂の左傍に有り

行者堂　講堂の後にあり役行者を安ハ

引接松

寶蔵　本堂の後に有る縞糸の真の曼陀羅を蔵む

五社明神社　本堂の後に有り　天満自在天神　八幡宮　白山權現　一百余社神　八大龍王

法華堂　此堂に右大将頼朝卿熊谷小次郎直家と奉行して建立し給ふ所ニ　法華堂に並ぶ

鐘楼　法華堂の傍に有り

不動堂　本堂の乾に有り　不動尊を安ハ

御供所

御影堂　法華堂の北に有り　弘法大師を安ハ

地蔵堂　御影堂の前左の傍に有り　六角造に地蔵尊を安ハ

阿伽井　地蔵堂の向に有り

求聞持堂　御影堂の右上の方に有り　虚空蔵菩薩を安ハ

庚申堂　御影堂右の前に有り　青面金剛童子を安ハ

念佛院　南の上の方に有り南別所ニ　本堂に善導大師の像を安ハ

阿弥陀堂　念佛院の内西の方高き所に有り　弥陀如来を安ハ　善導大師作　脇檀に中将法如絵賛浄土経書寫の画像を安ハ　自画ト云

山越阿弥陀堂　本堂の右の傍に有り　山越の如来を安ハ

蟻雲菴　本堂艮の傍に有り中将法如尼ハ此に住しの人古跡にて今尚尼僧ハ住ハ　此辺尼僧の菴三ケ所有り

和州寺社記曰中将姫ハ當麻の實雅法師を師として髪をおろし善尼と号し好意を以て文政の比法如尼と号ハ蟻雲庵と結んで念佛し給ふ蟻雲菴ハ當麻寺の東の方に有り堂あり尼寺なり中将姫命終の所なり云

雲五集に中将姫二上山に草庵を結ひ正身の弥陀来迎ハ命終の期にせんと念佛に昧に入寂々たる窓の前に月の光さしいれは光尼一人来りの人法如尼のやうにおぼえて

南無阿弥陀佛とぞ唱ふ　中将姫

尾ハ

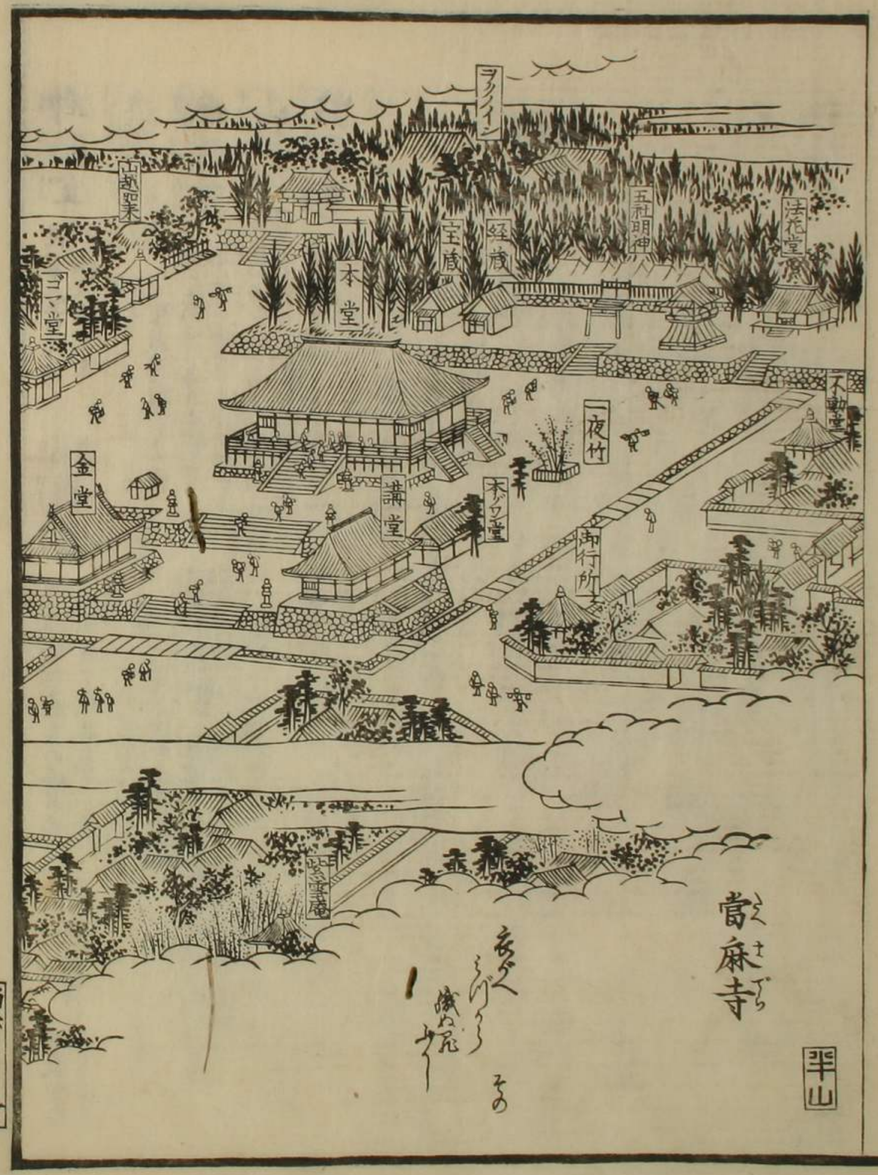
二上山

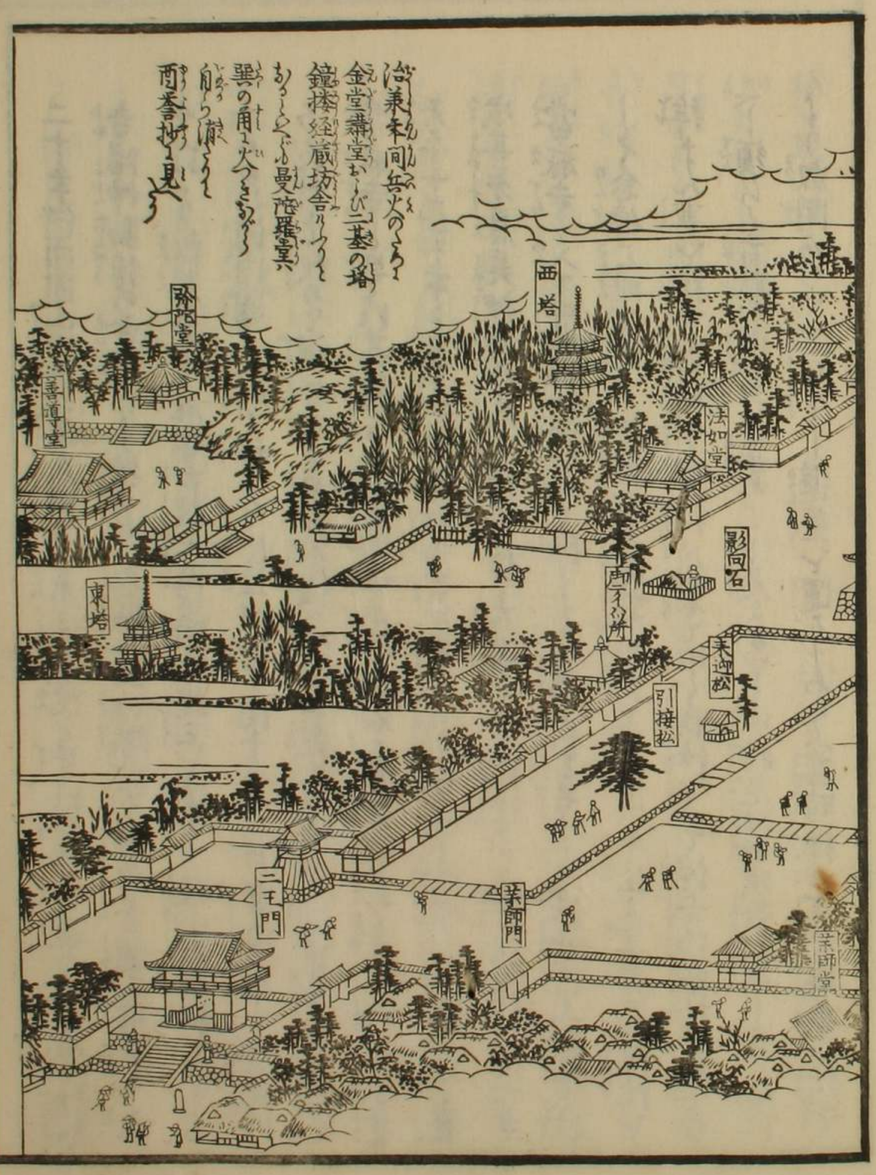
大門　本堂の正面通東に向ふ　金剛力士の両像を安ハ

藥師堂　門外の北の在　家中にあり

天満宮　大門の通北の傍　在家の内に有り

抑當寺ハ用明天皇第四の皇子麻呂古親王の御建立なり其初ハ推古天皇


ヨクケイン
五社明神
法花堂
宝蔵
経蔵
本堂
一夜竹
不動堂
金堂
講堂
御行所
當麻寺
平山


西塔
弥陀堂
法如堂
東塔
影向石
二王門
引接松

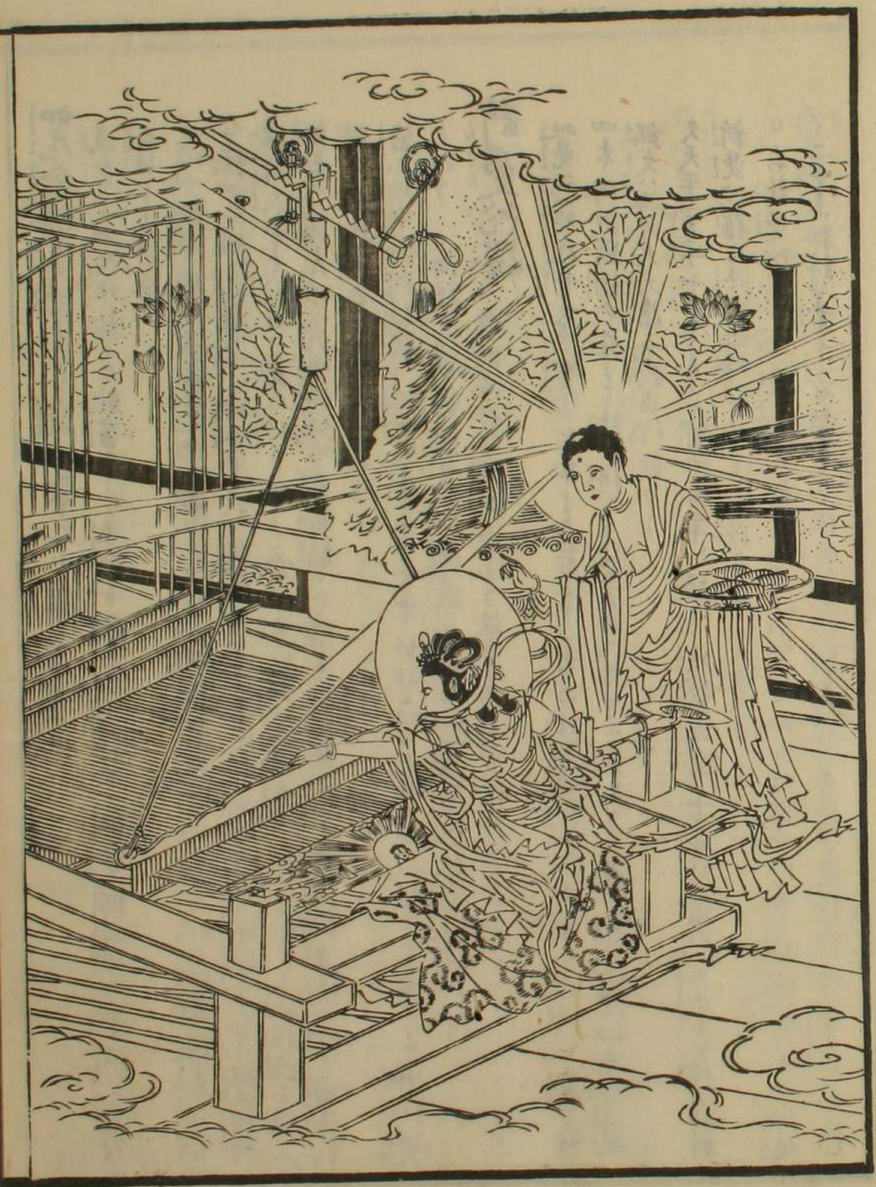
二十年河内國山田郷に造立りつて萬法蔵院と号し今の當麻の地に遷役行者諸神勸請の靈場なり然るに天武天皇白鳳二年麻呂古親王瑞夢と見るに依り叡感ありて麻呂古親王及び刑部親王と遣はして役小角の地とりしめしめ河内國より此に移して伽藍造營同十年二月堂舍悉く成就し

ちに於て改めて禪林寺と号し其後麻呂古親王の孫當麻國見真人改めて當麻寺と号し其後天平寶字中小横佩右大臣豊成公の女中將姫と云有天平十九癸亥年に生る幼うして穎悟書を善し天平寶字元年十一歳の時父豊成其弟恵美押勝の為に誅せられて左遷せらる姫嘗て佛道を信じ同七年當麻寺に入て實雅和尚を以て師となし尼となる号して法如と云ひ閑居に住し念佛三昧を修し稱讃淨土経數百卷を書寫し平生に生身乃弥陀を拜すん事を祈るに一時一人の禪尼来て曰く我汝を淨土及び弥陀を観ぜ須らく百駄の蓮莖を集めしめ是に於て中將尼此由を以帝に奏し奉られ叡聞ありて詔を下し蓮莖を運ばしめ其時禪尼自ら此莖を折く

絲と取て新たに井を穿ち水を濯ぐに五色燦然として澄まりたり數日ありて一人の化女きたる容貌端麗なり猶く禪尼に問ふ汝何者や答へて曰く早成佛なり斯て化女此絲を得て殿の西北の隅に於て之を以織る機杼乃音軋軋として初更に始めて四更に全く織なる其幅一丈五尺藁三把を以て油二升を浸し燭となし化女織物を捧ぎて禪尼に授く禪尼中將法如尼と与に淨土の衆相悉く美麗に備はる中將尼大に悦び節なる竹を求めて軸となし斯る長さ間に節なる竹のありても又奇異なり時に化女忽然として見えず禪尼かさねて四句の偈を作り図を礼して曰

往昔迦葉説法所　佛事新起又有故　感君懇志忍我来此　一至是場永離苦

中將尼問て曰善知識いづくより来るやつぞ又ささの婦人いづくの人ぞ答て我いづくの異なる者なるかん哉我則ち西方の教主なり先の女人観音大士と言なりつて空と凌いで西の方よりぞ去の中將尼なほ精進修行すべく勤む翌年九月又豊成勅許りて京に帰るべく寶龜二年二月廿日中將法



當麻寺の曼陀羅ハ弥陀
観音の両尊織ゆゑ府
もゝり其上品
上生中品中生と
間ゝ織ゝこゝろ
の銘文四百十
三字最奇巧
もゝり実ゝ
二国無双の
霊宝と
りゝゞ

如尼念佛安坐〳〵寂し年二十九 元亨釈書

或書云中將姫極りて能書にして本朝女筆の其一人なり弘法大師此姫の筆法とすあび

りひ〳〵〳〵〳〵

又曰中將姫横佩大臣豊成卿の女にして惠美押勝八豊成卿の孫なり初め押勝ゞ橘奈良麿

と綴ぜ〳〵時に兄の豊成も縁坐せ〳〵れて流竄〳〵接さきめひぬ中將姫八又豊成流人となり叔父押勝八

謀叛人なりまゝかゞ〳〵身の憚をいなりて當麻寺に身を隱し尼となりめひ〳〵伝説を傳へ

継母の綴へいなり〳〵中將姫の母八百能〳〵て隱きもゝ況負女なり豊成卿卒去の後も禁中に

住して内侍所の神職となり〳〵むゝ

當山坊中御剃髪所に紀云天平宝字七年癸卯六月十五日中將姫十七歳にして御剃髪

〳〵なり　尚坊中に中將姫有髪の像或糸掬の影像其余什寶許多なり

新曼陀羅　當時本堂に收むる所なり故に本堂を曼陀羅堂と〳〵

此曼陀羅往昔天平寶字七年〳〵なり四百五十二年の後順德院建保二年に勅許を蒙て同

四年阿波國浦の庄にて縁を得て同五年六月廿三日功なりぬ盡に良賀法印流慶法眼

銘文に修理大夫藤原朝臣行能なり

又天平宝字七年〳〵なり九百十五年を経て延寶五年古曼陀羅の蠹破を補ふ此時

新曼陀羅も共に再修いなりしを尚次に奉〳〵著に

○右新曼陀羅の年歴先に大和四趾幽考に以て大和名所圖會に寫し順德院の御宇保延

二年に勅許と蒙るに有然るも保延に崇德院の御宇なり按に建保と保延と書誤なり

重新曼陀羅　大雲院高野に上人收むる所時に延寶六年戊午二月なり　長一丈五尺

此余靈佛靈寶に許多にして枚挙をべからず後〳〵に畧す

西曼陀羅再修并重新曼陀羅寄附の説話

洛陽大雲院の高野上人に説法の大導師にて世に名高く原に淨土の奥

儀を極めに支に言もさ〳〵なり天台真言俱舎唯識の精〳〵き事まで捜り

求め内外の群典のこゝ〳〵猟渉〳〵まひぬ後年九條の里に菴を結び閑居し

めひ〳〵時和州當麻寺の曼荼羅に年〳〵千霜に及びあれば〳〵破壊

して末世の結縁も久かるべき事と憂ひ〳〵て補ひまゝ〳〵せ度〳〵て延

寶五年五月人〳〵と伴ひ當麻に〳〵ぬ中吉原頼朝公の寄附あり御厨子

蓮糸の大曼荼羅浅張ものにして四百有余の春秋と経ぬきバ板を剥して往古の

ご〳〵軸にもの〳〵巻もさるん支の子も一向に叶ひ〳〵て此移ひ既に止ちん也

時壹相の上に紙と〳〵染井の水と沃ぎ〳〵多單心無二に祈願い〳〵そ〳〵に

一夜黙〳〵に声〳〵して翌朝自然に板と離きて巻下に一點も疵つきもゝざり板

熊野権現老父と化して
曼陀羅修理の
繪具を与へ給ふ

ちゝび表に張り帝に本曼荼羅のごとくに細くと莊嚴に至るまで明らかに揚げ
ひらかれさせ給へ無て粗增に彩具そもそも調へ揃へかの欽損じたる所を
繕はんせんに何ぞとても色ひい似ざるは凡夫にあるべきと案じ煩ひ祈り
徒弟一両人二上が嶽に登りて鋤とかくぐ一人の老父に行ひつゝ此者
絵てはいかく此頃大曼荼羅修覆の事と兼りしかも繪具を望ふ
こひ〳〵進らゝべしと聞ゆるに両僧大に歡び此程の事と浩々つ憑〳〵べ
いざ来せのくして一群の森に道すがら行ものぞ熊野新宮鎮坐しの御社
あり〳〵て其後ろの方と掘〳〵彩の塊と獲させ給ひ皆〳〵ころこび禮謝を述
んとするに今まで〳〵有つる老父いづ方へ行しや終に見へざりしかば余に
ぞに思ひ村里の夫〳〵の人に問求むれども老人と曾て知りのあるされば
世古〳〵熊野権現此曼荼羅と本地〳〵して毎日此地に来臨〳〵して
傳へ〳〵さけば是ぞ實に権現の助力せ〳〵せの者ゝるし最尊く思ひつかの
補ひ〳〵色の似ざるは是あり〳〵ん〳〵伴の塊とひて〳〵見るに少しも遠ハざりし

たゝ奇異なき前つゝ西師が巧の叶ハざりしハ此奇特と絶しの御こゝろたゝ
なるゝん〻弥信心を起し〻各力を得て同年閏十二月十五日ハ修覆なりしぐ〻
成就し又文亀年中の寛圓比丘尼の願主にて後柏原院の宸翰のりし
新曼荼羅の再修同年十月十五日事初て次の年二月十五日ハ事
畢つゝぬ又新に一丈五尺の大寶相とうを求代の副寶にして寄附のりし
是と重新曼荼羅と申し〻て然るハかゝる寶相ハ銘文古例のりて最も異さ
當今の帝の御手自〻筆染させの事なれバ上人此由を朝廷に術へなれ〻
有難〻も勅許なり〻て宸翰の銘文をなし下され其上貴き賢聖の臺ハ
古寶相なれ〻び件の新図両幅かゝやんし〻せ玉の御冠と傾けさせのひぬ迦備
左大臣と初〻て諸寮百官なり〻拜ませの〻なり備又古の曼荼羅に久
年乱離なる所の藕の糸の微屑なれ〻び積るこゝろの香童乃粉塵なれ〻ぐ
拂ひ下し〻〻拾ひ〻拾ひ数外あり高貴上人なり〻所なりて慇懃清製
し粘〻〻九〻なり〻名伝曼荼羅種〻ん是と有縁の道俗に施与しの〻ハ

當麻寺の門前より
郷中の端〻を通り左右
分る右の方ハ高田〻
八木に至て長谷寺に
行道なり〻左ハ新庄
五所に経て壺坂寺
〻る順礼の街道に
此分れ道の傍に辻堂あり
叶〻と呼び尤の石の
五輪あり傳云當麻
真人國見の墳〻〻
國見ハ當麻寺草創の
麻呂古親王の孫にして
天武天皇の朝の臣に
日本紀に出

其信のつよきる人ハ數日ゝ光明かゝやき或ハ色轉じて五彩ゝゝ或ハ增長して大顆ゝゝ又ハ分散ゝゝ小舍利と現じ妖怪ゝゝて悖亂とゝ又沈痾ゝるものもとゝ度ゝ戒頂戴一少ゝゝ咽に決ゝ入ゝゝ勿ち不祥を除き心正ゝゝ病者ハ快氣ゝ又ハ称名ゝて臨終ハ斯のおゝゝの利益にゝゝ者世に多ゝト新著聞集に見ゝゝ

拾遺集　二上山當麻寺に籠て疫上のすを見るに凡千ゝも経るゝゝん大ゝき牛ともかゝゝ

りゝんのを悲情ゝゝる佛縁ゝゝて斧行の罪とすゝぐもゝるゝ幸ゝゝてゝ

俗名新発意のゝる法の生　くゝゝ

奥院往生寺

本堂の西山の方ゝゝ本堂ハ圓光大師の廟と安ハ傍に阿弥陀堂方丈庫裏

（樓門お魏々ゝゝ當院ゝも寶物ゝゝゝ則ち本尊弥陀佛ハ恵心僧都作）

當寺に安置ゝる源空上人の遺像ハ桑原左衛門入道真像と寫ナ行ゝて上人自ゝゝ開眼四十八度に滿ゆひゝ靈像ゝゝ其初ハ洛東智恩院にゝゝて年暦と経ゝゝしゝ十二世誓阿上人の時或夜の夢に我額ふ釘と打りのゝて苦脳忍ゝゝと翌朝拜禮ゝるに誠に御額ふ如何ゝゝん竹釘と打ゝゝる是と拔ぐ血の流ゝゝ事肉身にかゝる事ゝゝ又或夜の夢の告に我本師ハ當麻寺曼陀羅ゝゝ彼方に移ゝ居ゝし彼曼陀羅堂の乾ハ功德池ゝて千世の青蓮花有と教ゝさせゆひて夢さめゝ衆僧いやゝゝ當麻寺に巡行して尋ねまゝも蓮華ゝゝ思ゝに役小角むゝゝ諸神勸請の所ハ清淨の地ゝゝゝゝて土を穿ちゆゝゝ地底に青蓮花ゝゝ則ち堂と建ゝ遺像成ゝゝ往生寺と号ス

練供羅

例年四月十四日　十三日ゝゝ十四日に至つて法會と修行ハ中將姫の忌日ゝゝゝ傳ゝ忌日の正當ハ三月ゝゝも今月行ゝゝ事故ゝゝ

練供羅縁起に曰此来迎ゝ接の法事ハ恵心僧都成置ゝ此僧都ハ生國ハ和州良福寺と台邑の人也難波の後永觀中叡山ゝて此法會と行ひ始めゝ其後寛弘元年の頃僧都寛卯供奉ゝ共に此所に来ゝ来迎の本尊又二十五菩薩の假面と用ゝ同二年二月十四日法如往生の日と以て迎接會と行ゝひゝ是則ち横川花臺院ゝ寫ハ所ゝゝゝゝひ四月十四日ト云一説に四月十四日恵心僧都ゝゝめて行ひゝ日ゝゝト云

當日の行粧ハ本堂ゝゝゝ接の套すで高さ三尺に巾四尺の床と掛ゝゝ此上に二十五菩薩の形勢に出拵ゝ人ゝ練行ゝゝ出行ハ中將法如往生の躰かゝゝ入ゝゝ成佛の形ゝゝト云其菩薩に擬ゝ人ハ郷中の四家ゝゝて是と菩薩備ゝ号ゝゝゝも古例ゝゝ

大坂山口神社

同宮村ゝゝ神名帳出

天羽雷神社

當麻ゝゝ凡乾十五丁許加守村ゝゝ

龍峯寺

同加守村ゝ其跡ゝゝ傳ゝ元ゝの神代の皇子ゝゝ龍ゝ化ゝ雲に乗ゝて行方ゝゝ

今加守明神ゝゝ神名帳出

ゝゝの人其追福のゝゝ建のひゝ寺ひゝゝゝ實説詳ゝゝ

腰折田古跡

當麻村より艮の方廿丁許良福寺村にいたりて田圃の字に殘まり更に見る所なし只古事ふるきのみ出ん

垂仁帝七年當麻邑にいと力の勝たる人あり名を當麻の蹶速といひ角とさに釣もどとのぐるに敢安くいきば世の中に我が并べもん力はいなでる有んやと心に思い詞に出ても語るれば天皇かまに合せるん力人いりや近臣たちみ出て傳聞出雲國に野見宿祢といひ渠こそ力勝き侍きと奏しる程ふさ〳〵ば渠を召せとて其日倭直の祖長尾市を勅使として野見宿祢とめ蹶速と角力を取しめひきを平ひふ蹶ふりるが遂に蹶速が脇骨を蹶折らせて命を失ひあり勝る賞に蹶速が地を野見宿祢に賜まりちと腰折田と名づもく其舊址今遺しあり日本紀

福應寺

右良福寺村の隣村狐井村にいり惠心僧都の誕生の地なり天慶五年ちに生る其古跡もありと云

釈源信八姓八ト氏大和國葛上郡當麻郷の人也父の名八正親母八清氏さりしが父母ともに子なき事を悲しみて其郡の高尾寺に詣で子を祈られば母夢に一僧来りて一顆の玉を与へらるとと覚て則ち懐妊の心地あり終に月みち出産

いり今有源信幼雅の時に夢に見らまへ高尾寺に蔵いりるが其蔵の中に許多の鏡いりて或八大なる有或八小いり又八明らかにして物を照らもいり又八暗くて見へぬもあり斯る時一人の沙門あり其暗くて小き鏡をとりて源信に与へければ源信の曰斯る小く暗き鏡何の用ぞ豆づきや願くば大きにして明らけれそ所望もりしに有り老沙門の曰只此鏡を以て横川に至りて磨るべしと言るすれば夢忽ちに覚る故に深くあやしみ思ひまはらが成長の後叡山に登り慈恵大僧正に事へらること始めて夢の事を思い合されり程に精進修學のそばこ比時の間も退屈の色を見せず専朱天性聡明にして顕密の教を究め五種法師四種三昧の品こまでも修練せざる事ハもりに諸方より来て學業を羨る者甚数を知ぬ時に當て惠心院僧都とぞ称ハ号さりる續往生傳寛仁元年七月十日遷化壽七十六釈書

孝婦伊麻墓趾

行内村より當村當麻より一里許南にて行内越の峠と東に下る麓の街道の傍に標石あり今申年百五十年の遠忌に當て村中より是を吊ふさうと標石の傍に新塔婆を建る

奉吊孝女伊麻心樂妙祐禪尼弟壹百五拾廻諱離苦得樂之寶塔

弘化五申載孟夏上七日

○里人其家とこしへに今ハ絶て子孫やもなきと

近世畸人傳云大和國葛下郡竹内村に寡婦ありて伊麻と云ふ年六十に余りて尚老たる父に仕へて孝篤し寛文十一年辛亥六月老父病甚だしくして日数経て飲食とおもうさざれば伊麻も亦た事頻りなるにかの日々病の隙なるを窺ひて鯉魚のいとけなき是を喰んとすれども此里山中にて覓ること能はざれば如何とせんと惑ふに夜々更過て瓶の水に音ありて伊麻おどろき怪しみもとめて見るに好める所の鯉魚瓶中に踊りあれば喜び取て膳に調へ進めしに是を父乃病日々に快く常に復せしぞ芭蕉庵桃青貞享五年四月に大和路を行脚の次に聞て涙ぐましく頃て京に来りて書家雲竹に語る雲竹も又感ずるの余りに自ら大和に行く其婦に対面せんとせしに門人友竹為に代りて行その姿を寫し来りて即雲竹其図像の上に自筆にて紀せり同年八月既望とかや芭蕉雲竹ともに聞ゆる人々に見聞のたぐひなる縉斯のごとく実王祥が氷裏の鯉孟宗が雪中の筍と唯むかしの物語ものがたりに等閑に聞すてし人は驚き怪に足ぬものなり

廣漢に住る妻持ハ母に仕へて至孝なり其母常に魚の膾を好み且江漢の河水を好り凡此河水を求むるハ妻くの道を隔てとをくも是をとんで母に与へしば終に我家の庭中に清泉涌出毎朝鯉魚二献づゝ水上に踊て出るハ是をとりて母に供へるゝや

孝婦伊麻が

瓶の中に鯉魚を得るも

和漢同日の論なるべし

長尾神社

長尾村にあり延喜式神名帳に出雲麻呂壷坂寺にいたる嶮路の道條にて且竹内越を経て壷坂寺に至るも此所に出る街道なり村中の半途にて西道の旅人出會是より壷坂まで一條道にて尾嶺路の行程八〇先當麻にて平田長尾今市小留弁の庄を経て新庄にいたる一里半〇新庄にて花内新町にて村松本を過て御所にいたる事一里半〇御所より第五寺田拘氣車水兵庫薩摩まで経て土佐の町に至る事凡二里許土佐の町づゝ在鎮に清水谷村より又右衛門屋にいたりてより〇壷坂寺に赤る凡土佐より壷坂へ半里余なり

左右所々尋ねるに八ぐまも街道の左右ふゝて路直なるゆゑに行程も又右ほどに心得べし

布施今市地蔵

今市村の入口右の傍に草堂一宇あり地蔵尊と安置傍に草庵あり

虎石虎ゞ〇此辺にあり

當村地蔵尊八曽我十郎祐成の愛妾大磯の虎女の会ざる所なりしゝ甚初建久四癸丑年祐成生年廿二才富士野に於て復讐の後空〳〵草葉に露〳〵ゝと悲嘆のいきり飾成なるに墨染の姿〳〵なりて竊に當地に来て此草葺ほ跡とゝゞめ亡夫の跡浅吊に同五郎時宗の妾化合坂の少將なりしも其頃剃髮〳〵此所ほ尋〇来て二人同居して俱に念佛修行なるゝもん草堂の傍辺に小川ありて宴に架せる小橋と虎ゞ橋し祢ゞり則ち虎女が架せる所なりしゝ又堂前に虎石といへ有是虎ゞ墓ぞるゝ〳〵ひりし草葺の畧縁紀に見へゝり

現徳寺

今市村にあり長尾ほつゞく街道なり

蓮如上人御遺跡 一向宗

影現寺

柿本村にあり此所ハ街道にて新庄の此方弁の庄より東へ凡五丁許にあり

本尊十一面観世音 鎮守社八本堂の右の傍にあり

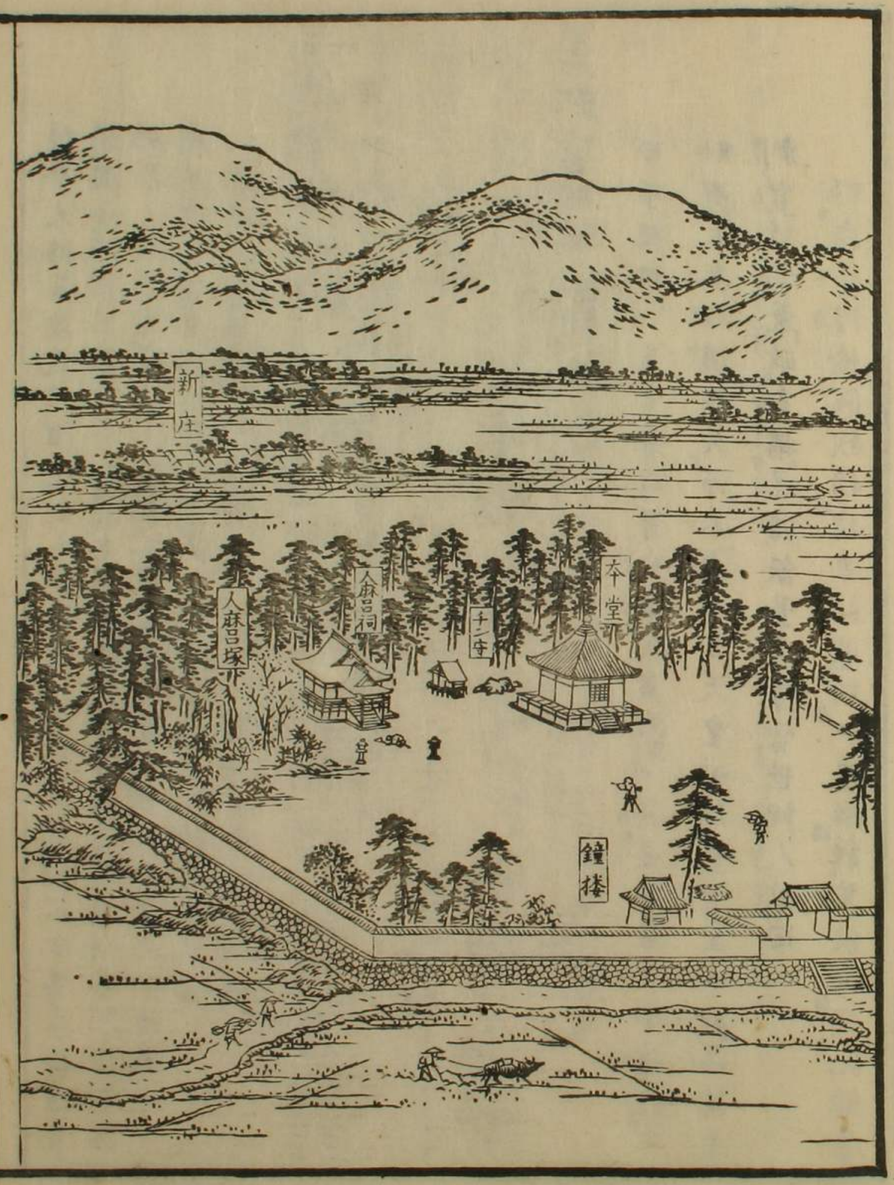
柿本人麿祠

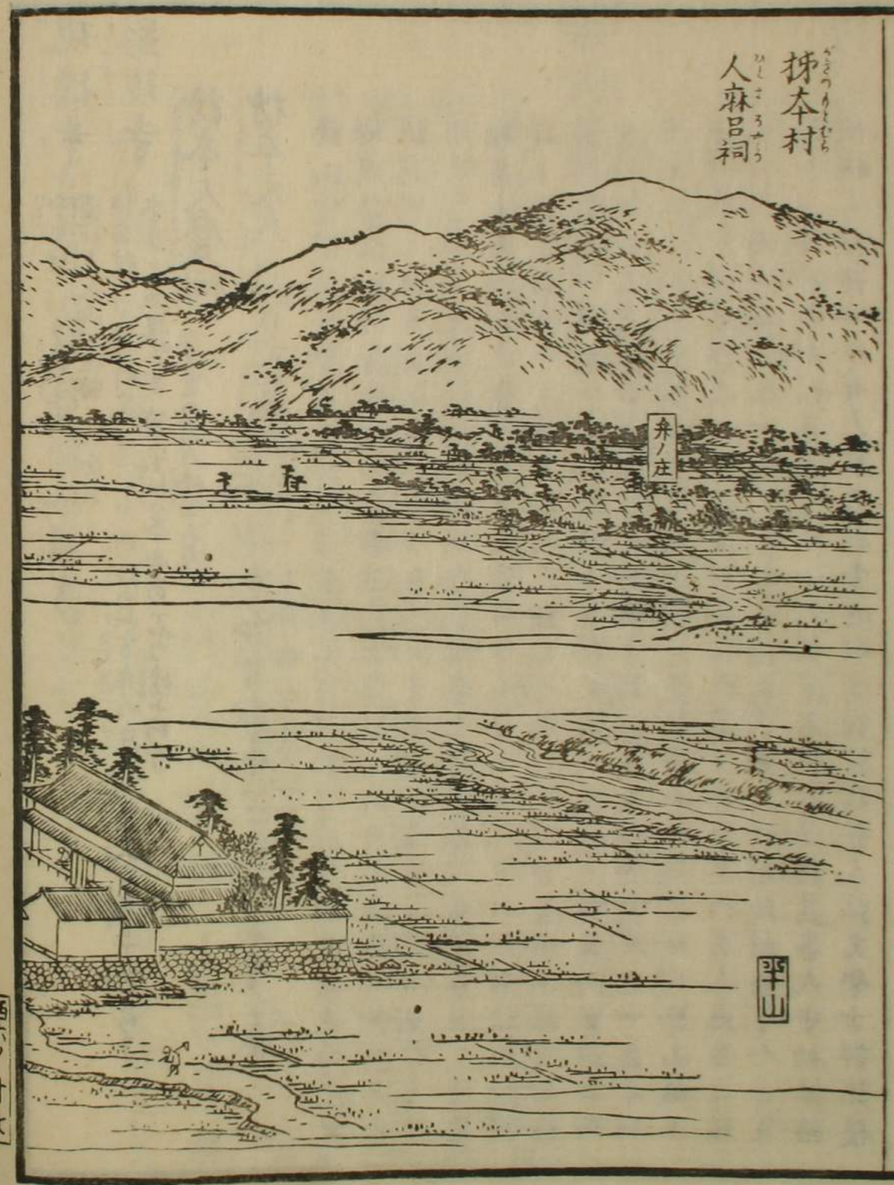
本堂の右の傍にあり

柿本大夫人麿呂之墓

右祠の傍ほいり碑石の高さ四尺八寸許臺石高サ一尺余自然石にして裏に銘あり左に記ス

商山雲深不可攀不可陟桃源路迷不可遊不可到然非天地之外是以皓叟悠然以隱黄髮怡然自樂彼人而遺此也此世而遺彼人故車馬跡絶爲別天地者也偶有如張子房陶元亮者而得問商山得泝桃源也舉世皆不知之豈子房元亮獨知之哉出塵之操與潔之情同氣相求同聲相應也則商山之雲桃源之路豈必背人哉人背之也大和國添郡柿瀬石上之邊柿本寺有柿本大夫人麻呂之墳世移時替基趾湮滅曾聞藤清輔尋其旧蹟刻小碑詠歌而去其後鴨長明尋之不得矣問歌墳在何處而始知之人麻呂者歌林之仙獨歩絶倫者也清輔長明者千歳之同士也試心所求豈不至乎哉猶子房元亮於商山桃源也和州郡山城主日州太守源君信之一日語余曰其領内葛下郡柿本村有人麻呂之墳士人傳稱人麻呂生于茲故後人建墓也蓋其自歌墳所移葬乎今已荒廢僅存旧礎是以修其寺院建小石欲垂不朽也請記其事太守初鎮播州明石城浦畔以有人麻呂祠堂建碑請詞於我先人弘文學士詳記履


新庄
人麻呂祠
十二年
大平堂
人麻呂塚
鐘楼


抂本村
人麻呂祠
弁ノ庄
平山

歴今又修其墳墓可謂能知人麻呂者也自然之好因不亦奇乎嚮雖有清輔長明然不遇太守起廢之舉則誰問其跡尋其風哉明石不遠朝霧接影人麻呂之霄息于此遊于彼長濟千歳之美也亦是太守追遠之一端乎其於事業則民徳帰厚者可以期焉乃誌于碑陰爲後證

天和元年辛酉十月中旬　　整宇林鼇直民甫識

金村神社　新庄より西二町許大屋村にあり　**為志神社**　新庄より二町許南林堂村にあり　延喜式　神名帳出　十二所権現祇　忍海郡

神名帳二代實録出

宇佐神社　新庄の東二丁許花内村の内あり街道そばの右の方に

三歳山八幡宮と云

當麻山口神社　新庄より十町ばかり坤の方山口村にあり　延喜式　神名帳出　葛下郡十八坐の其一

遊の園　新庄村より坤の方八丁許笛吹村にあり　**笛吹祠**　同上　**火雷神社**　同上　神名帳出　**笛吹池**　山口の隣村梅室にあり

角刺宮旧址　忍海村の内街道すじ新町より右へ入て一町余村中の入口宮あり　飯豊皇女の宮跡なり今此女王を祭りて生土神の神社とす　例祭九月七日

日本紀曰　五年春正月白駿天皇清寧崩是月皇太子億計王仁賢興天皇顕宗譲位久而不處由是天皇姉飯豊青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政自稱忍海飯豊青尊當世詞人歌曰

野麻登陸佾。我保指母能婆。於戸農海純。苔純掩賀紀雑屢

都奴波之能弥野宮　角刺

忍海寺　右角刺宮の傍にあり則宮寺なり忍海郡忍海村忍海寺と至ての詰判めるし今堂の単菴にもとり本尊八観世音にして長谷寺の尊像同木なりあるに俗に枝木の観音と称又弘仁天長年間の老樹にして一千有余年乃皇霊と歴代の霊験の観音にも号く

袖そ松　同村道の傍にあり野口の堂にも云　故に樹下に制れと建てみなれに枝を折て伐禁

街道そば新町村の傍に標石あり鎮して曰

是より堤半町西入　大和忍海郡忍海村　天保十三歳壬寅初春

袖そ松　袖乃松　一名野口の松

東武山西水藩　碧斎主人　大原重斯建之

来迎寺　竹田村にあり御所村の北二丁許街道の左の方に　飯岡山と号ク　浄土宗

葛上郡に属ス

鴨都波八重事代主命神社　御所村にあり近隣五ヶ村の氏神　神名帳及び文徳實録二代實録出

水越川　葛城川に入葛城川八五所の町の東を流る　水源水越峠より開屋名柄鍬服を経て御所村の南に至る

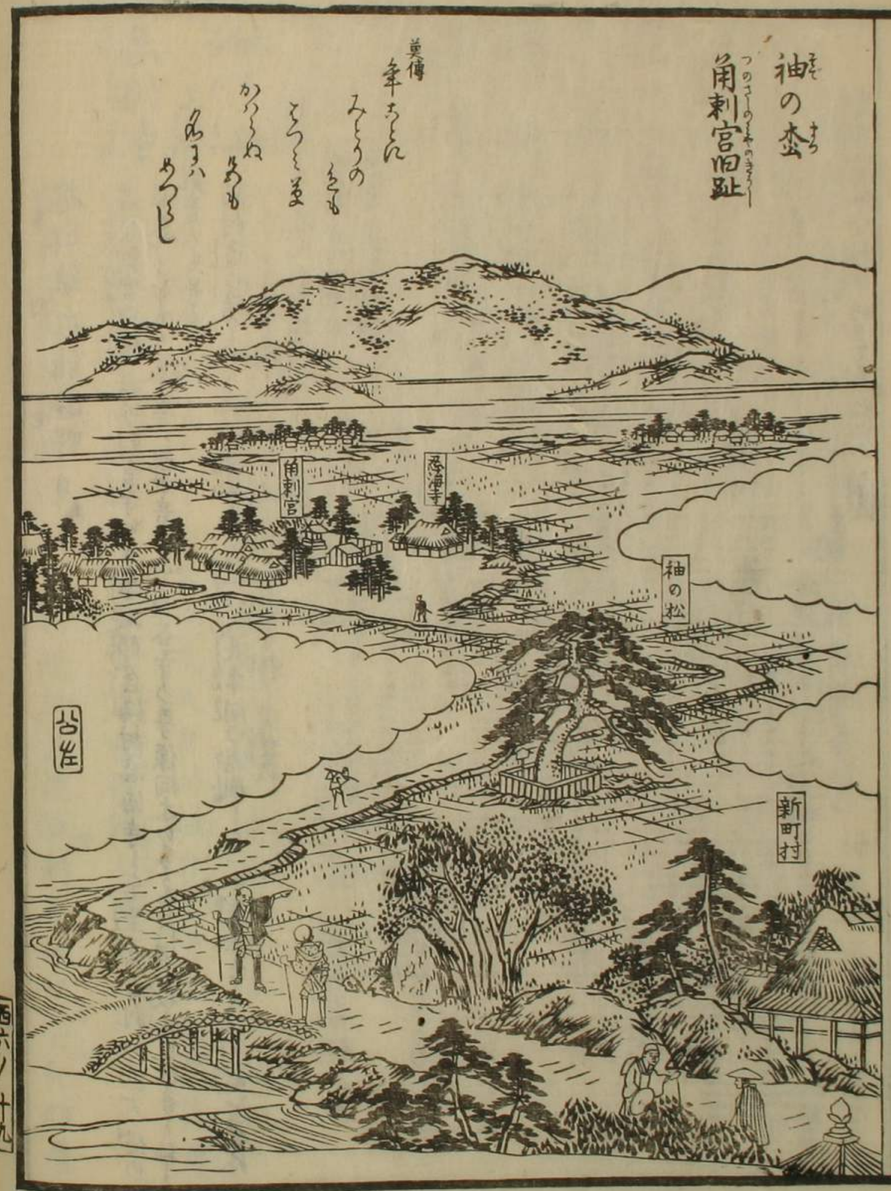
磐余若櫻宮古趾　御所の南蛇穴村の領内に西京と字する所あり是則ち應神天皇の御宇皇居とつたへあり所なりと　街道の右の方に

室秋津島宮古趾　室村甚跡もなくなる此地は蛇穴村の西にして向ひ川と隔つ　日本紀に仁皇二代孝安天皇二年十月都茂室の地に遷されて秋津島と号けかくなり

孝照天皇陵　同村の領内にあり　北凡二丈六尺余　山上に天皇社　山高サ東凡五丈許　西凡五丈三尺余　南凡六丈許　字天皇山と云　祠殿瑞籬外の廻姜垣あり是接の上博麦の白号なり

二町余　山の麓より接田博多守の田畑あり是接の上博麦の白号なり

毎年八月廿八日神事ありて孝照宮と称ス



延喜諸陵式曰

掖上博多山上陵掖上池心宮御宇孝照天皇在大和國葛上郡兆域東西六町守戸五烟云

葛木大重神社 神名帳出 櫛玉命 重丘・同上 縁樹生茂アリ 林中祠アリ

葛木坐一言主神社 森脇村アリ長田豊田官戸 寺田 寺田ハ五ケ村の生土神ニハ 延喜式神名帳出 祭神ハ孔雀明王アリト一言主社紀ニ見ヘタリ

本社 一言主神 左跡陀 右文殊 不動 観音を安ス 社僧 真言宗 一言主寺 本社の左ニ隣ス

摂社 神功皇后 本社の左傍ニアリ 二之社 出雲大神 天満大自在天神 住吉明神ハ本社の右ニ列ス 寶庫 本社の左ニ有

護摩壇 応神天皇 神前石階の下ニアリ 鏡石 護摩壇の傍ニアリ 辨天祠 宝庫の左下の方ニ有

二之鳥居 松林の間ニアリ 一之鳥居 森脇村在中ニアリ 石の鳥居 本の鳥居

寛文紀曰葛城大明神ハ一言主ニシテ女躰ニマシマシハ本葛城山の嶽ニ宮居ニシテ今ハ其麓の田の中ニマシマスト云又舊事紀ニハ葛木一言主神大和國葛上郡ニ坐ハ是素盞烏尊神子ニシテ又天孫本紀曰大々出見尊十二万六千年の時速刺利主神又一言主ニシテ日本紀曰雄略天皇四年天皇葛城山ニ狩シ給ヒ時一言主神出テ天皇ト共ニ箭戍放ち雷ヒとゝ

一言主神社

神詠曰

ちはやぶるかみのいさめをうけてこそ
ちりはらきばかみはなすなれかげを
うつさんつるぐむもつるくんん
やどんのんぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
みぐばのしぐしぐしぐしぐしぐしぐ
ちはやぶるかみのいさめをうけてこそ
ちりはらきばかみはなすなれかげを

和論語一所出

夫木

ちはやぶるかみのいさめをうけてこそ
人も契るなれ
一言主の神の御ちかひ

頭昭

秋もさてやつたわの
ぶまき
一露

一言主の神社五所の街道
二十町余り坤にいろ茅原寺ホ
道で壷坂に至る大五所より森
殿に行て又五所より分て
茅原より壷坂にいる是凡
本道より又森殿にすぐホ
山越に壷坂にいる道ハ
右近ー

鹿戎逐ひ夕陽に及ぶの時田を耕す天皇と来目水に送ふり此時村民
悉く奇法の天皇なりと賞じ奇
一説に大穴六道尊子味鉏高彦根命ら　紀日本紀

續日本紀曰天平寶字八年十一月庚子復祠高鴨神於大和國葛
上郡高鴨神者法臣圓興其夢中漸將監從五位下賀茂朝臣田
守等言昔大伯瀬天皇雄略御宇時有老夫毎興　天皇相
逐爭獲　天皇怒之流其人於土佐國先祖所生之神化成老夫
爰被放逐今撿前紀不見此事於是　天皇乃遣田守迎之令祠本處

此事釈日本紀にも高賀茂朝臣等奏して葛城山の東麓高宮岡上に
むかへ鎮め奉るを見へたり　土佐國にも義は信用せざるべし四説もあるべしも既に續日本紀に其説とあるはずと四跡考に云
神階は貞觀元年正月廿七日葛木の言主神を従二位に叙せらるる事二代實錄
に見へたり然るに同時に高鴨神を従一位に叙したり

按に日本紀に天皇四年春二月天皇葛城山に射猟したまふ時見たまふ言主神

と稱ひ面貌容儀天皇に相似て長人なり又續日本紀に所に老夫ありて
毎に天皇と相逐ひて獲を爭ふ云々とあり然るに大同小異あり然るに言主は春二月乃
射猟の時のみ見えて偶に鹿戎逐ひ夕陽に及びて天皇と来目水まで送ひ
奉らざりしなり又續日本紀に高鴨神は毎に天皇と相逐ひて獲を爭ふ
あまた老夫と化して毎度見まゐらせ尤天皇は性質伉健にして
しかも毎に射猟に出ませる事かたがたに見てとうに然るに二代實錄に高鴨
神と言主神は別に有其事の似るを以て之神と同じ世のうち後人當考かんべし
拾遺　岩橋は数の賢しき為ぬべしいかる俗しき葛城の神　春宮女官人左近
續古今
忠戎の流れ乃神の夫にぞ為ひて流れ流れ　加茂氏人
續後拾遺　葛城の神ぞ為ひて流れ流れ
古事記曰幼武天皇雄略登幸葛城山之時告曰雖惡事而一言。
雖善事而一言離之神葛城之一言主之大神者也。天皇
於是惶畏而匍匐

神社考曰三井寺山伏入峯者語余曰昔入峯者問神名神答曰主従此又主一言主神

往昔役行者小角葛木の嶺より金峯山に渡る其間危うく嶮しく所あまた苦行の者いづくにか尚此道を人跡むる事なりしてを石橋と架し通路を開くべしと呼事茂山神と命じ衆神大の命とうち寄く夜く岩石を運び宮むしく厳かひう然まども其成就おそうしく役小角呵て曰く何ぞ斯成就遅しと責る岩と對て曰く葛木の一言主の神容貌いと醜さとりつて晝夜いとい夜とすちて出る事に自しに日を歴ふ〜〜行者安〜〜思ひて一言主と催促といつでも一言主かつて皆ゞとざりしゆ大きいつて咒縛の法と行ひて石を索といて咒縛深さ谷に繋ぎ置りしを此事書に見て古く言つて伝る縊ひう故に奇に多くひら絞いつしひて明る事の俗にきしと絲を過るふりの花さうつく峯〜〜霞まうるる明ぶの〜けに

○大和の國と行脚してぐ〜れ山のうりと人の口さぶく世に言つて伝ふ行者の刻を式

高宮廟

森脇村ふりう蘇我蝦夷ゲ祖廟あり

皇極天皇元年蘇我大臣蝦夷祖廟所と葛城の高宮に言ふ〜日本紀に曰

又古懐の水泥村に今木の双墓〜〜ふりあり蝦夷の墓と大陵〜ひい入鹿の墓と小陵〜ひ〜〜日本紀に見や死亡ひて後に〜ろに葬るあり

池心宮舊趾

五所池内両村のあ〜〜れうり五所〜う第一に至る往道の右あり

日本紀曰 孝照天皇元年遷都ありて是と池心宮〜〜〜

五所新庄高田の辺ハ悠て木綿の緒ゲ千〜とゝ〜る種〜の畢〜〜る縞の類ひ或ハ絹の糸を交つてめ〜ゞ〜に縞と織出れと家毎の手業〜せう是ハ世に大和縞と号〜て名産

〜〜さんば村中に蓋漆の紺糸〜〜数の絽糸と染て軒端に干〜表の傍ハ機織婦女小哥と風ひ裏ハ糸繰老婆

旅寺とうぐる凡の長に仕人の商人あれば氣の短き織屋の親にうて恰もうひの如く美盤の音撥音に混じて甚静うちうぐる〜正〜土地の業〜〜〜〜〜〜

茅原山金剛壽院吉祥草寺　御所村うの街道より茅原村にいり一名茅原寺

本堂　五大尊　中央大聖不動明王　降三世明王　軍荼利夜叉明王　大威德明王　金剛夜叉明王

行者堂　神寚大菩薩　役小角世二代の像と彫刻

観音堂　本堂の右の傍にあり　千手観世音と安置　笈掛杉　門内左の傍にあり　役行者笈とかけし人今枯て其勢のみ有

伽藍神社　祭神熊野權現　行者堂の左の傍　香精水　熊野の社の右前にあり

護摩壇　行者堂の前にあり地上ふ石と四角樂く形ち甲のごとし　鐘樓　笈かけ杉の傍にあり

當寺八人王世五代　舒明天皇の創建にして役小角の開基なり則ち此地ハ小角誕生の所にして行者出誕ふ凡一千二百十有余年の古跡なり

役小角ハ賀茂の役公氏にして今の高賀茂と言ふの也和州葛本上郡茅原村の人なり少きより悟り敏く學ぶ事博ふして無く佛乘と鄕ふ然るに年二十二にして家と棄て葛木山に入巖窟に居る事二十余歲藤葛と衣とし木果と食に充らきるこうさんに孔雀明王の呪を持ち五色の雲に駕つ仙府に優遊し鬼神と驅逐して使令し凡日域の靈區と修行遍歷して殆ど

言所なし然るに文武天皇三年讒言の為に豆州大島に配流さる彼方に居そる事二年ゞ間晝ハ禁と守るゝ居るゝ夜ハ必ゞ富士山に登り其道と行るゝ海浅鞜で走るゝ家も陸と行に異なゝ甚疾ゝ飛鳥も及ざるゝゝ大寶元年廻る事と欲さる終に同年十月七日母と鉢に載せ海に浮んで直に入唐ハトゝ　壽齡六十八歲　或ハ六十九トも

腹上嘯間岳　街道の五寺田村の北四町許にあり　一名望國山ゝ

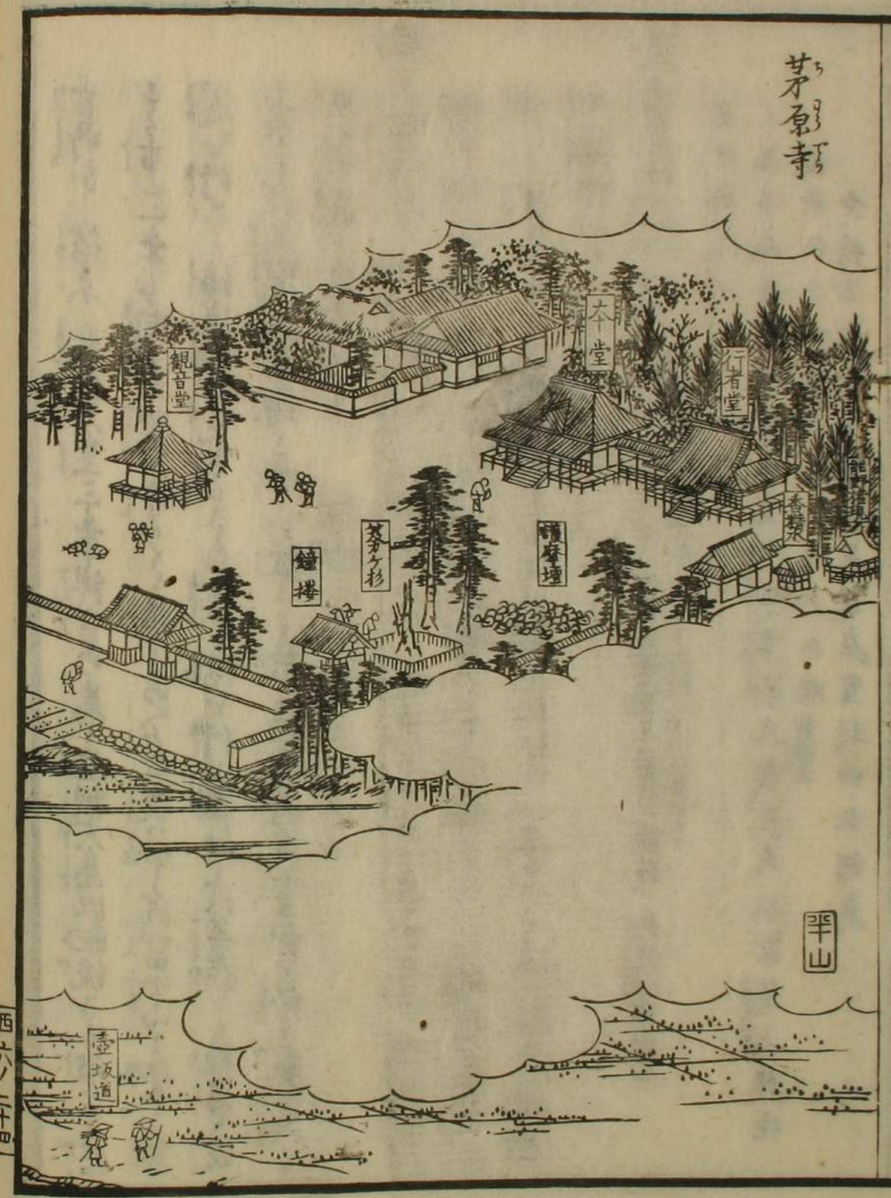
登るに給ひて國の狀と見めぐしと内本綿の真迫國ゝ蜻蛉の臀咕如ゝ宣しゝ秋津國の名あり臀ハ尻なり咕ハ掌なり西ハ額東ハ腹南北ハ両羽なり　釈日本紀

孝安天皇陵　街道の右の方五手村にあり山高九間余廻凡百六十間許　御陵山或ハ宮山　一國低き所ハ八幡宮の社あり拜殿鳥居玉垣あり

前王廟陵記云

玉手丘陵室秋津嶋宮御宇孝安天皇在大和國葛上郡兆域東西六町南北六町守戸五・烟　諸陵式

今按玉手丘玉手村是也在室村西北河東



役小角賛

道德全者鬼神不
得而窺矣役君神
異可謂不測者焉
然遭神誣受竄讒
豈咒力有未充之處
與。古記曰道昭師在唐時
五百群虎共來作禮一虎
人語曰新羅山中衆虎之
所伏也願師赴山導我暴
獰昭默受請乃至役講
法華群虎側聽其中有
和語者進曰我是日本國
役小角也昭愕然問曰何在此
對曰本國神曲誣是以我遁去
化異類耳然或又有往矣云云 元亨釋書

白鳥陵 同冨田村にあり 人皇第十二代 景行天皇第二の皇子日本武尊の陵なり

日本武尊東夷を亡ぼし帰陳の時伊勢國能褒野にて薨じ給ひ御歳二十歳即ち能褒野の陵に葬奉る時白鳥と化して飛のぼり群臣推とひしに見奉りしに只明衣のみありて白鳥は大和國琴弾原に止まりせのひしろは甚だ所に陵を造る又白鳥飛で河内國舊市邑に止まりのひしろ陵と呼ぶも築て白鳥のこ陵にて終に翔て空に衣冠と葬るべし 日本紀

弾琴原 冨田原各両村の間にあり

葛城川 水源は金剛山より流れ出て持田寺田御所村を経て恐海郡に入る

橿原宮 柏原村にあり御所村より凡廿五丁ばかり向へ街道なり

日本紀に神武天皇畝火山西南橿原に都したまふ

大和巡覧記曰畝傍山は今井八木の南道の四五丁西にあり山の麓に畝火村拘負村にあり神武帝の橿原の都の地なり一説に山の東大久保にあり所橿原の都の跡なりと日本紀に神武天皇長髓彦を亡ぼし天下を定めたまひし畝傍山の東南橿原の地は國の真中なる故に都を定めたまふと見へたり

佐田丘 佐田村にあり萬葉に多く出たる佐田の岡真弓の岡などと合せて尚奥に委しく出る

重坂川 水源は葛上郡にあり重坂川に落ちて檜隈川に入る 高市郡に属す

名寄
弓あつさのさとふゆん佐田川に桜さしうえ大わかとしふ

此辺より真弓檜隈の名所に近しといへども奥の岡寺のつゞきに出せばそれに洩れたり
土佐の町に滞留して此辺を順覧あれも可なり然れども先手が順覧の日に記之
土佐の町の上の方にあり今は高取山といふ山勢峭抜として一郡の主山なり

鷹鞭山

相摸家集
狩人のあさ日かりしも鷹鞭の山乃紅葉はのどかなりしな

高取山城

土佐の町を登ること凡五十余町あり坂路羊腸たり是要害の地
南朝の頃築きて北朝を禦ぐところ今は植村侯領し給ふ
土佐の町といふは右高取の御城下にして工家商家立つらなりて賑はし 此近郷の繁花なり
茶店旅籠屋も奇麗なり

竹取

今は高取と書く 詞林採葉に曰竹取の翁の旧跡は大和國竹取の城なりとておぼつかなし聞て
是ありとの人竹取物語の翁は駿河國大綱の里に住し人なるは別の人なるぞ侍りなんかし

萬葉集
昔有老翁號曰竹取翁也此翁季春之月登丘遠望
忽値煮羹之九箇女子也百嬌無儔花容無比云々

翁歌
死者木苑相不見在目生而在者白髪子等丹不生在
八方
又娘子等が詠る歌九首あり略之

子嶋山觀覺寺

本尊 大日如来　開山堂あり
千手院と号せし世に子島寺より天平年中建立の古刹なり後世大に廢れ近来再建ありしが有て追々に旧観に復する形勢なり
本堂の上の方に
真言律宗
此地は土佐の町の北の端なり

人皇四十七代廢帝天平寶字四年報恩沙弥高市郡子嶋神祠の畔に伽藍を建て一丈八尺の觀自在菩薩の像および四大天王の像を安ぜり其寺を名づけて小嶋寺といふと釈書に見えたり
報恩沙弥は延暦十四年六月に寂スト云又中興は勝悟法師ト聞ゆ真興も此に住せられし故に世人子島の先徳と號くとぞ

子嶋神祠

小嶋村にあり今春日と称し土佐村にも生土神とし

高生神祠

舊は高取の山上にありしを天正年中土佐の町つゞき清水谷村にうつせしと云
二代實録に出 例祭九月十九日 清水谷二村中に生土神二社あり當社は東の方之

清水神祠

右同村にあり 是西の方の生土神にして 例祭九月九日之

清水井

右同村高とりのやと設る在家の内にあり近郷にあまねくびろき清泉なり
土人曰此清水あるをもつて地名を清水谷と号けしとぞ

靈鷲寺

桃源山常喜院と号す清水谷の山方にあり本尊薬師如来左右に十二神将列す
長さ千躰佛の薬師如来厨子の内に充満す 服櫃の左右に不動明王 弘法大師を安す

越智家之墓

草庵の上の方に古墳の石塔婆五基あり二基は文字滅して見へず漸に
二基あるいはあがれ讀得たり
其法名に曰 傑甫光容居士 天文十八年己酉六月五日
天仙宗祐大禪門 天文十九年庚戌四月廿六日
土人曰越智玄蕃頭の墓と云按ずるに越智家は代々大和國に住して和州諸将軍傳云應永二年筒井の初代順永の麾下とあり又天文元年辰の春南都合戰の條下に越智玄蕃頭利之は高取の城主にして父を大學助利元といひ同従弟小治郎利祐といへり同書に高取玄番頭越智利之は和州高市郡高取山乃城主知行一萬五千石順慶の姪婿なり麾下土佐小次飛鳥氏五千石合せて二萬石也トあり天正十二年冬十月二日高取山の城主越智玄番頭利之四十八歳にして死去せり勇武の士也トあり然れば此二基は玄番頭の墓にはあらん余二基の内あるらん大和名所図會には越智家數墓とあり是は何をもつて断は

勢せ〜武家敬〜ふる事おくに聞つべき僧に問つゝも曾て知るこゝろ〜尚考べ〜

波多磯井神社 清水谷の隣村羽内村にあり今天照太神と祢に 神名帳 二代實録に出
傍に清泉あり

第六番 壺坂山南法華寺

清水谷村の東壺坂山にあり俗に壺坂寺〜いふ
清水谷〜より登る〜十二丁 真言宗 本堂巽向

本尊 千手觀世音 長一丈六尺道基上人作 本堂八間八角造 拜堂八間 二間〜

觀音堂 拜堂の右の前に有正中八弥陀佛左右共三躰を安に

歡喜天祠 稲荷祠 金毘羅祠 辨財天祠 東傍に列に

二王門 觀音堂の右にあり 金剛力士の両像を安に

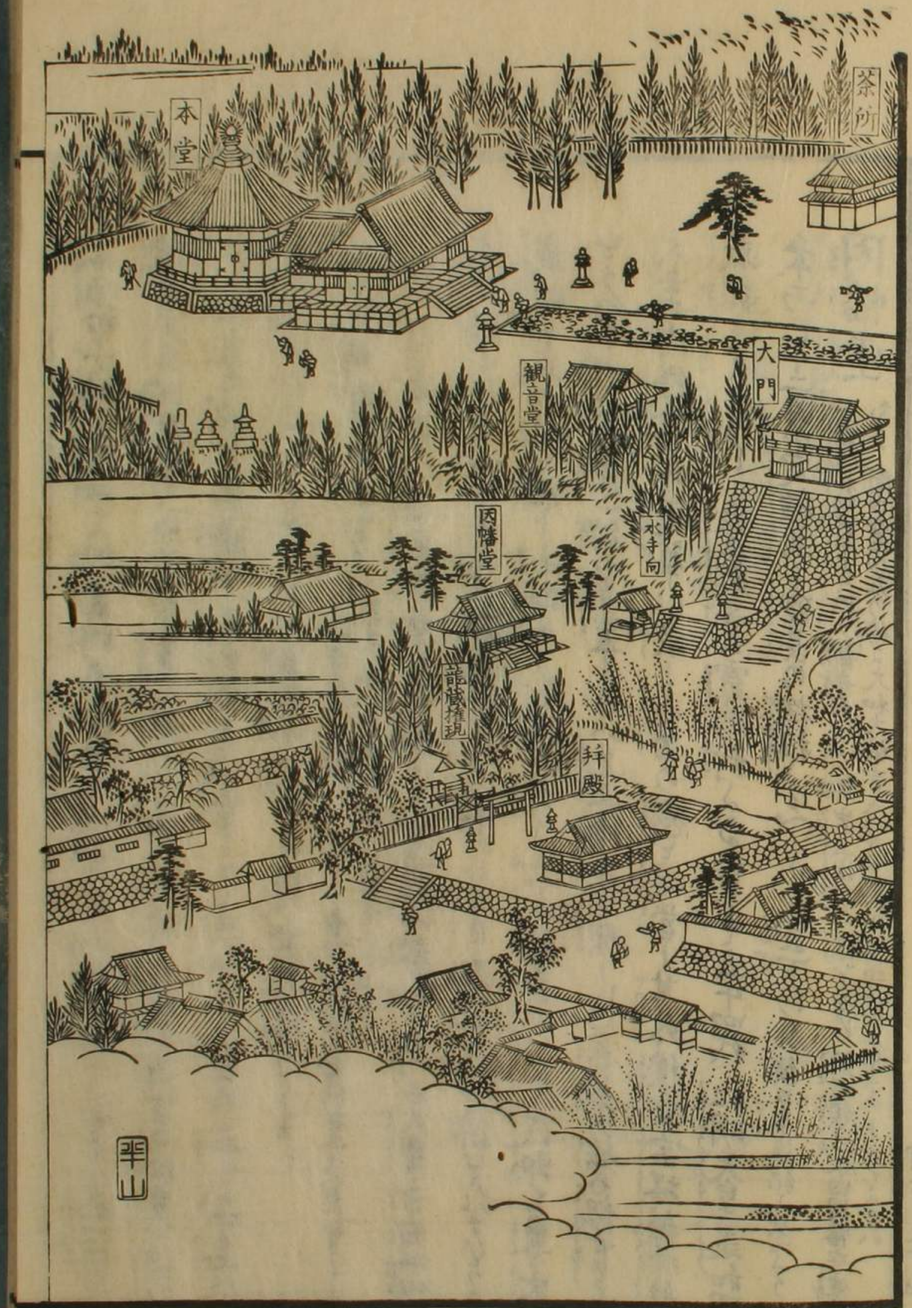
鎮守龍蔵權現社 大門の外泰清道の傍に有吉野川赤根谷に出現ありし龍神〜云

二層塔 拜堂左の向にあり 本尊大日如来

鐘樓 宝塔の上の方にあり

當寺八人皇四十二代 文武天皇大寶二年道基上人開山 元正天皇養老
元年勅願也〜云 寺記 霊驗記真鈔曰壺坂寺丈六千手の像八道基上人乃
開基なり然るに此道基上人千手の呪を誦する事毎日千遍余に及び畫
夜臥せずして生身の觀世音を拜まんと誓ひしに或昔山霧に添て瑞光有
怪〜〜て光りの本を尋〜登るに〜〜ば一箇の霊壺あり光りを放つ道基上人此
壺に向ひ丈〜千手の呪を誦して生身の千手大悲の像を拜まん〜祈りに

忽ち丈六の千手の像大光明を放ちて此巻に出現〜のして云〜汝年来信仰
厚に依て此壺の内より出現し我像をうく刻〜て此巻に留めて安置せば遐邇の
男婦と安樂世界に引導すべ〜〜告のして化〜去ぬ道基上人信心歡喜の胸
と開けあれに依て千手の像を彫のべ 嵯峨天皇願年〜成のして精舍を建立
まゝ〜〜今壺坂寺〜〜是也或云 桓武天皇の願主報恩大師の開基〜も言
つる二事少〜異〜〜べる並べ紀〜〜疑〜りと傳〜る者也〜
按に大和古跡考に八開山八元興寺海辨僧正也〜〜り然るに縁起に 報恩沙弥
りきび小島寺と壺坂寺〜〜りてや然るに 報恩沙弥八天平寶字四年 和州
高市郡小嶋神祠の畔に伽藍を建立〜一丈六尺の觀自在尊〜四天王乃像を
安置して子島寺〜号に子嶋寺八土佐の町の東十町ばかりに有壺坂寺八土佐の町
の東南一里ばかり南法華寺〜号に本尊千手の像八道基上人造營也開基
八元興寺の海辨上人也 拾芥抄 又帝王編年記に 文武天皇大寶二癸卯春佐伯
姫足子の尼善心〜いふ者有て高市郡南法華寺を建立せ〜人也 冥應集に


本堂
茶所
大門
観音堂
丙午堂
水手向
拝殿
平山

第六番
壺坂寺
大塔
札所
吉野道
惣門
西六ノ二十八

本浄日子嶋と壷坂とハ開基別也らくらも中古ゝう一所の寺ともまう花山院の
時分真言阿闍梨ゝの人ゝり是と世ふ子嶋の先徳ゝの人今密宗の秘事と傳ふ
るゝハ子島の流とバ又ハ壷坂ゝも云然ゝまバ一寺ゝゝ兼帯せゝもゝ今ゝ子島ハ
古堂一宇西已ゝりて四丁ゝゝう東の山に登りて開山の石塔ありゝゝ
右ハ霊場紀の大概もり　子嶋寺の事ハ前ゝゝりくゝせう當時の住僧ハ壷坂寺の長老もるゝ
一説ふ道基上人ハ原元興寺の住侶ゝて智徳名譽世ゝ聞ゆ大寶年間此山ゝ
然まバ今も兼帯同様ゝ相續もるもゝべゝ
光明赫ゝゝるゝ怪ゝゝ必ゝ霊地もゝゝん攀のゝり日夜霊應と祈ゝたまひる
或時千手の相と現ゝ千眼光ゝゝと放ちゆゝ上人歓喜斜もゝゝ即ち尊容
とゝつゝ水精の壷ふ納め安置ゝゝ元正帝是と聞ゝ養老の始め紀有ゝ
大士の内縁八葉の蓮華ゝ表ゝ八角の殿と建営ゝ其外禮堂宝塔鐘樓経
蔵魏々ゝりトゝ　原来此寺ハ霊驗新ゝゝれゝゝて五千四代　仁明天皇嘉和四
年丙己十二月ふ定額平ゝ宦長の捨授ゝゝゝゝゝの宣下ゝり續日本後紀ゝ見ゝゝり
因幡堂　二王門石階の下ゝゝり観音三十三躰岩上出現の像と安八　前の領ハ主本田因幡守建立
もりゝと聞也堂内左の傍ゝ大和大納言秀長本田因幡守同左京ゝの木像と安八

大和大納言豊臣秀長公ゝ像　長等身

大光院春岳紹栄大居士

天正十九年辛卯四月廿二日逝去

壽五十二

和州諸將軍傳に云天正十九年辛卯四月廿二日大和和泉紀伊の大守従二位大納
言豊臣秀長生年五十二にして和州郡山の城に逝く中村弥助昌吉入道筑阿弥
ど云男にして秀吉の弟なり壯年より秀吉の副將にして諸度の戰場にて智
勇數ゝ遑なるに遑なるべくして其量も寛仁なるを故に天下挙て惜み母堂大政所
悲嘆甚だしく絶食絶氣なりしも豊臣家にも愁嘆落涙甚だしく近江中
納言秀次丹波中納言秀勝もいとゝ浅井弾正長政増田右衛門長盛石治部二
成等にして兼ゝ病中なりし郡山に往き天下の名医等に命じて看養せしむ今
又諸寺に於て追福品々なり

不動の瀧。聖天の滝。北山覺彦墓。拔殿地蔵。瀧の不動。矢取地蔵は境内にあり

五百羅漢石　西界曼陀羅石　壺坂本堂より凡八丁ばかり東高取の山中にいる巨巖の石
酌ホ彫つけり壺坂奥院より尚此余山中に佛像を彫
歳石多多　高香山と号し真興上人造立せし縁起に見えたる久慶長年間本多俊政創立とする比
寛文大和寺社記に曰高香山と壺坂より八丁程東の方に近き頃本多内州安置しめて五百羅漢を
きり付る石佛の事なり切付る石佛おりまれなり近来まで有しかども尤羅漢石の前に石燈爐一基ありて勤行を曰
慶長十二年本多俊政創立多し
詠哥　岩ゝとたてる清水ゝ壺坂の底ゆくゝも浄土なるらん

岩と立ゝ此山の景色と初て言出せり水とたゝくは壺と言ん冠辭ゝ壺
は水流たゝゆる物なるゝ故なり庭の砂なるゝ下此寺と極楽浄土に準て詠ぜし
なり岩と立水と湛へ形勢と極楽の八功德池に觀ずるなり庭の砂も則ち浄土
なりと詠ず無量壽経に極楽の八功德池の水庭は金砂と敷ゝ説ゝ意に據
もう詮ずる所此寺に參詣ゝ觀世音と念ゝ奉るゝは外に浄土は有べからず全く
此ぞ安養界なりゝと義なり觀経に説諸座道場生諸佛家
要解に曰念佛の行者一心不乱なる時佛現ゝ聖衆護念ゝ給ふ我草のいほり
忽ち浄土なり眼前の草木も極楽の寶樹なる是とこ昧發得ゝ云然れば
今岩と建ゝは浄土の樓閣ゝ見へ水と湛へと拜ゝ八功德池と見るべし庭の
砂も浄土の瑠璃地ゝ變ずる心法詠じの人ゝ

極楽と遥けき彼とぞ思へども　動てゝる法なりゝ　一遍上人
極楽は中にあるゝ極楽乃　意も重なりゝ　空也上人
ゝるべきる時ゝ　極楽乃　世の中に人

壺坂奥院高香山
佛像石五百羅漢
ヒラドウ
平山
西六ノ三十二

香水
茶所

盲人澤都
壷坂の観世
音を祈って
利益を
蒙る

霊場記云　當山の観世音を祈りて甚感應を蒙りたる輩尠からず過し寛文の頃
及當所の辺土佐の町に澤都とゝ言盲目あり當寺本尊の来歴を傳聞り抱
武帝の眼病平愈の御喜びとて造りたてまつれる佛の慈悲は平等か高下
隔はなきもの我も又此観世音を憑まゞやと思ひて一日參詣して一心に念じて
言はゞ〳〵盲〳〵既に幸に及びぬまゝ両眼明らかに顕はさるゝ只大慈
大悲の御加力にてせめて昼夜の分ちを知ざるふ成下さまとて一向に打願ひ
夫より風雨寒暑とも厭はず日參〳〵千日に満ずあれども金せるまゝ
色〳〵まゝ澤都大に腹を立て〳〵聞ざる御佛なる神社に詣で斯ばかり禱
あゝ〳〵ハ驕も有ぞ情なき佛とうら〳〵頼〳〵悔〳〵と杖を上て其辺
地敲たゝ一首の狂歌　酒壷を轉ばしたる壷坂の堂も佛と同じ土塊　か〳〵
續て様〳〵悪口〳〵帰りたる後〳〵澤都〳〵呼聲にて誰もなんと振返
ばゝ両眼忽ち開けて盲ざる以前よりも猶明らかなゝ沢都金の黍けたる五体を
地に投て雖有涙〳〵むせびつゝ前非を悔〳〵禮謝の為に其夜堂内に通夜し

宝号と唱へ暁方少し寝ねる夢に本尊つぶさに宣く汝罪業深きゆへ
盲人も成し眼ぐらく明らく浮さたくも頓て悪趣に墮しるべ何の益なけん此
祈と縁して毎日歩くを運びるべ其功徳にて身中の罪障悉く消滅し命縁
盡る夕べ八月出度浄土に生ぜしめんと思し故に総じ今日まで捨置しぞ御告
げなまば沢都いと感悲むかぐると喜び信心肝に銘じ夜明れば吾家に
暇を其後一日も怠らず日参御恩の程と歓びある斯て生涯病も脳む
ちらして生前に産業を乏に事も老後に至つて無て死期成知て臨終に
会して大往生と遂るこそ所の古老翁の物語り前さ侍り仍書紀しく
後人の信心と催るに縁とりやし思ひ情る嗚呼大悲の御誓ひ最深甚るめ
こや信ぜべし又崇むべし

當寺より第七番岡寺に至る直径八町再び五位の町に戻り夫より岡寺に詣べ
行程凡二里余又吉野より多武峰小廻りて岡寺に出まば凡行程十里余先吉野
に至る壷坂の門前より左坂を登る峠より十町許下りて

右下市高野山の道
左ハ ちかべ比蘇寺道

又夫より十四五町過て岐路 右ハ越部 左ハ比蘇寺 此所に農家一軒あり 越部村の内 越部の一筒家
より人是より比蘇寺に至り吉野六田川に出る凡行程一里許又越部より六田川より
出るも里数大抵同じ尤檜垣本より下市に至り吉野に登れば六田川の南岸に至る

吉野郡

比蘇寺

他田荘比蘇村に在り一名現光寺又名吉野寺とも
今廃して林中に伽藍の古礎と存ハ

日本紀曰 欽明天皇十四年夏五月戊辰朔河内國言ハ泉郡茅停海中に梵
音震響ありて雷の声のごとく光彩晃曜ちて日の色のごとく天皇心に異みな
ひ溝辺直と遣て海に入て求訪溝辺直海に入て見るに樟木の海に浮ぶを
玲瓏なり遂に取て献る天皇畫工に命じて佛像二軀を造しむ今の吉野寺に
光を放つ樟像也 佛像時に光を放ちなり 現光寺とも

霊鷲山世尊寺

右比蘇寺の廃趾に在り曹洞派得宗之則
当寺ハ吉野子寺の神社の此方獅子尾坂の上に在りて廢寺を接世ちに再興ハ
是比蘇寺の本尊にて日本木像の初なり

本尊 釈迦牟尼佛

太子堂

本堂の右の前に在り
聖徳太子御自作の尊像と安ハ

大疑堂

太子堂の右の傍に在り文珠菩薩と安ハ
大悲堂の額と掲ぐ開山雲門之書

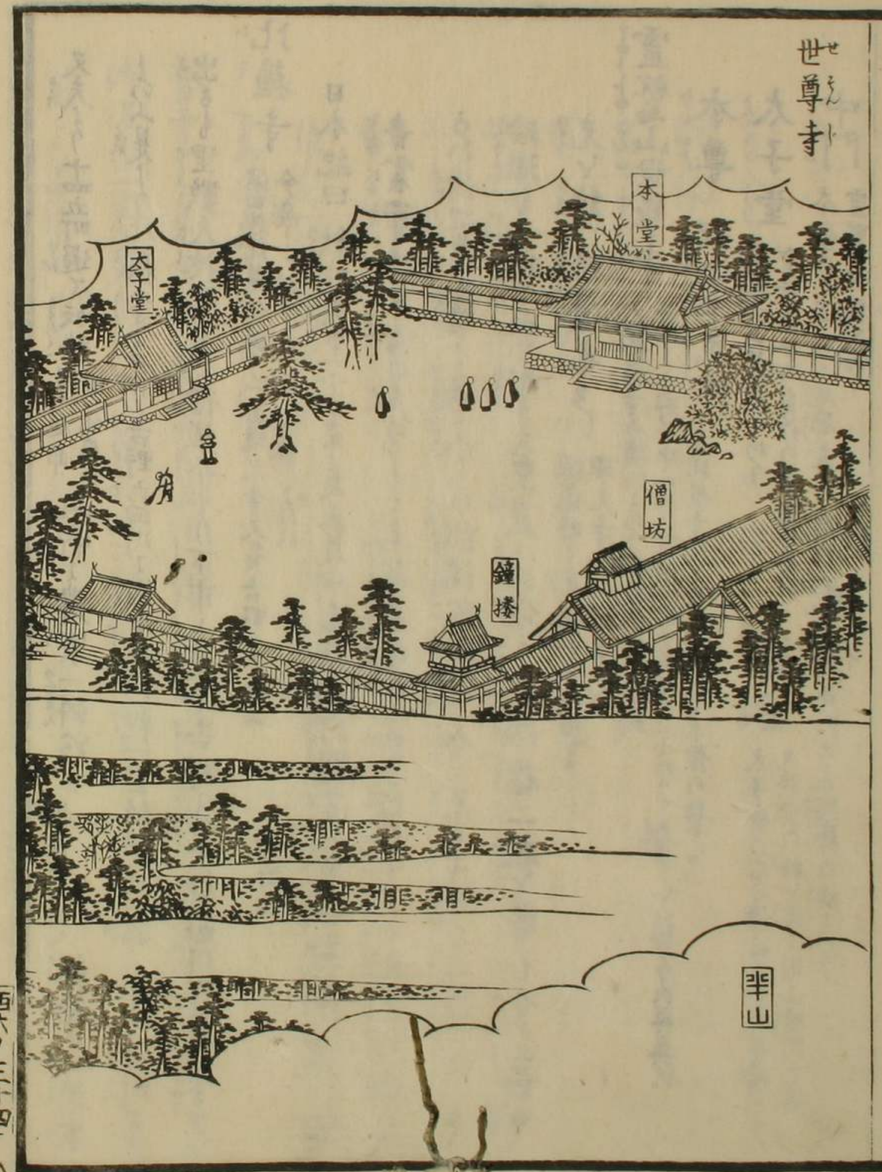
中門

本堂の正面に在り廻廊左右に列ハ

鐘楼

中門の左廻廊の端に在り
霊鷲山の額と掲ぐ

世尊寺



此地ハ昔比蘇寺の四址なり
也境内の林中に古礎石
許多存せり尤今歟當寺の
本尊に安置するのハ比蘇
寺の灵佛にて日本木佛の
こゝらにもん同の此灵佛
祈く光を放ちのゆゑに
比蘇寺を現光寺とも号
三代実録曰
遣使者於現光寺
燒燈燃綿以修功德云

鎮守社　天照大神宮　惣門の内左の傍にあり

惣門　中門の正面にあり　額に云　日國最初法窟

比蘓寺之古礎　中門の傍林中に多くあり往古大伽藍なる事思いやるる時し地下に古瓦と掘出せり　比蘓寺古瓦　径六寸　厚一寸

近来予得て蒼々園のごし

六田淀　世尊寺より六田川の渡場まで凡十五丁余　柳の渡より川の畔と六田村より

是則ち吉野山の麓より六田の淀又六田川も六田の河とも　万葉集出

新拾遺　ゆふされば川波さわぐ六田の淀乃水鳥の妻恋ふらしも　義詮

續後拾遺　さくら咲あら山と風吹ぐ六田乃淀に春ぞ暮れぬる　大宰大貳重家

吉野名産鮨　下市村にあり下市八六田の川下一里にあり　鮨屋弥助　元年郷中より皇都

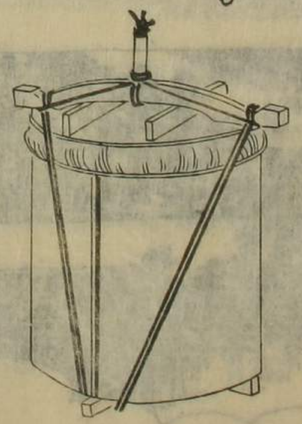
小献上の鮨も此家にて調味し其製吉野川の鮎をもつて鮨に是を盛器鈎瓶のかたち

似たり故に之鮨にして其味ひ美なり

鮨桶之圖　檜の曲桶に漬つゝ藤葛を以て上を搦む

桶の寸法凡　高サ二寸七歩許　大小両様有

口径外のり四寸五歩許



土人曰　例年吉野七郷　新住下市　阿知賀　丹田　飲貝　上市　増田

院御所にて高家の方に鮨の鮨と

献ぜ来ること年久しくして郷中の面目なり毎年四月八日漬初度の献上

五月八日二度目の献上都合両度なり尤鮨屋より献ずるハ七ケ其昔ハ七ケ

村年〻順番にて當番の村に於て製し献ぜ来るこ府下市村に宅田屋何

某なる奥高人にして鮨の調味に馴しこと此家に托して漬させ献ぜし事

有しより年〻其加減の遺ぶるを為にして終に例年宅田屋に打任せて漬させ

しこそ夫より此家の名物にして献上の時すべ平日も製して高〻なれど

然るに後世義経千本櫻なる浄瑠璃の戯作此家に事と取組て作せしより諸國にその

名高く聞(主人の名さへ更にして鮨屋の弥助と称し世に斯る例も又少なし)

安騎野　下市善城両村の間にあり　仙覚抄曰　吉野山の方にあり　萬葉

いにしへの野にはあらねど旅にしてもの思ふ時に鶴鳴わたる

秋野川　下市川にして水源吉野山より出て下市にて流る則ち吉野川へ

東野　右に同じ言塵集曰　此東野ハ芳野の安騎の内なり

藻塩草に吉妻野安騎野同名あるこの小野にもあるとか　萬葉

東野乃炎の立ちにしてかへりみすれば月かたぶきぬ

為尹千首　雲素野は此東野ハ平らの原なるべし袖にたに萱ぐ下ある

六田の淀
柳の渡

万葉集
音聞き者未見
吉野河六田の淀
与杼乎今日見
鶴鳴

南都百景
玉柳六田の淀
長くとも
見ぬ日はなしと
思ふ人かな

後鳥羽院御製
藤良公

平山

六田之町

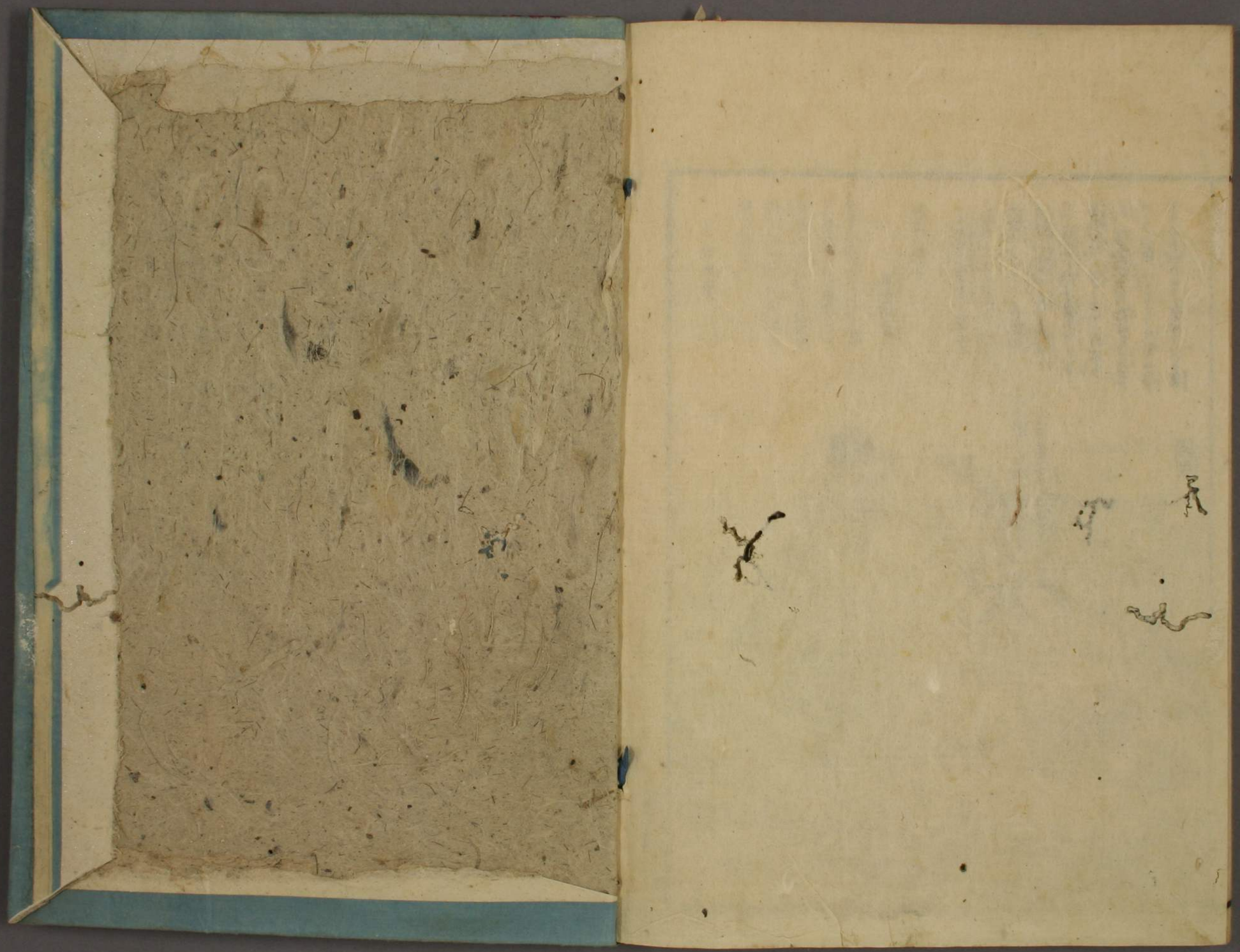
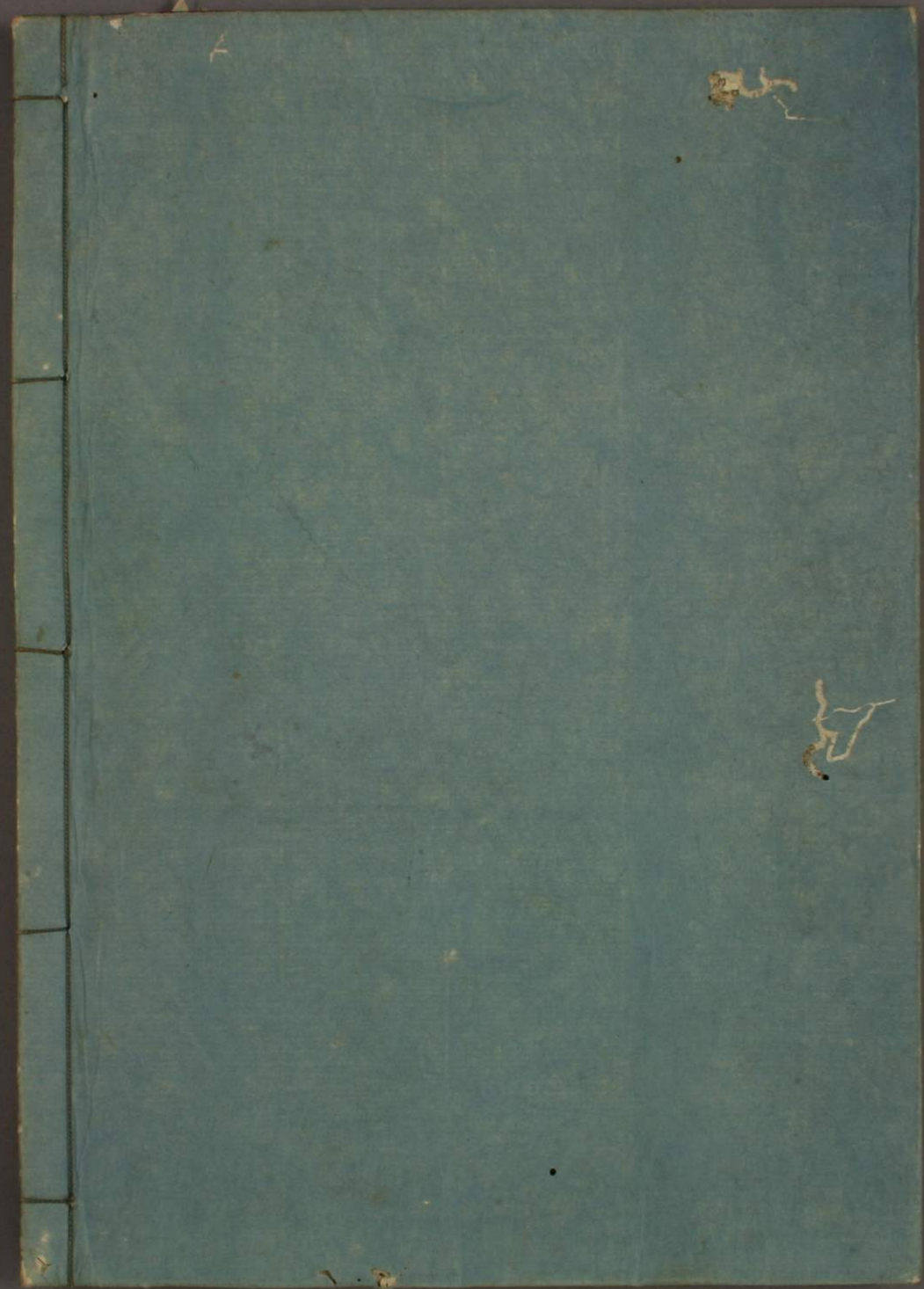
七ノ

いつ〳〵吉野の里に味揃と云る男
ありて吉野川にうゑて魚梁と打て
魚を取る柘の木の枝もろ〳〵まりて
其魚梁に留りしを取く
るに忽ち化して美女となる
是則ち仙女なり終に味揃と
夫妻のちぎりを結老に
死せずして幾ほ久しく住り
し此哥方集に見へたり

従駕吉野宮

高向諸足

在昔釣魚士方今蓬風
公彈琴与仙戯投江將
神通招歌送寒渚霞景
飄秋風誰謂姑射嶺駐
蹕望仙宮

右懐風藻

西六ノ二十七